
過ぎ行く日々、色褪せない想い.....。

小春十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎ行く日々、色褪せない想い……。

【Nコード】

N9845W

【作者名】

小春十三

【あらすじ】

高槻悠は向かいに住む幼なじみが気になっていた。子供の頃から一緒な二人。けれど、高校からは別々……。そして、最近、彼女に……。PIPII掲載済作品を修正して投稿しています。

気になる子

高槻悠は、一人自室で窓の外を眺めていた。

一般的男子高校生の部屋としては簡素なその部屋は、ベッドと勉強机に本棚タンスがあるだけの寂しいもの。

フローリングの床はよく掃除がされており、ベッドカバーには鞆が作った皺があるていど。隅っこほ丸いクッションが立てかけられただけの殺風景な部屋だった。

「……」

日が沈みだし、辺りは夜へと変化する。鈴虫の鳴声がそこらかしこから聞こえ出すと、昼間の暑さも忘れて秋を実感できる。

「!?!」

悠は窓の外に気づき、ブラインドを下ろす。そして角度を調整し、隙間から外の様子を見えるようにする。

視線の先には向かいの家の門をくぐる女の子の姿。相模原高校の臙脂色の制服に身を包んだ女の子は、さらさらの黒髪を赤いゴムで結んだお下げの子。後姿を見る限りでは幼い印象があった。

こっちは向いた。隠れないと。

ポストま中を見る彼女にどきっとする悠。

細く切れ長の目は整った睫が優雅さを醸し、細い眉がやや気の強そうなカーブを描くも、可愛らしい唇の桜色が少女のたおやかさを忘れない。

驚いたときに目を丸く開くと、黒い瞳に吸い込まれそうな気持ちになる。

顎に届く前髪をうるさそうにかきあげ、一緒に汗も拭う。

健康的な肌は、少し前までは確かに白かったのに、夏の日差しが憎くなる。

美琴……。

悠は玄関に消える彼女を見つめ続けた後、ふうとため息を漏らす。

江成美琴。彼女が彼の最近の悩みの種だ。

彼女と悠はお向い同士ま幼馴染で同い年の仲良しこよし。幼稚園の頃はいつも一緒に手を繋いで登園しており、何かというと「悠ちゃんの嫁さんになる！」に「美琴ちゃんのお婿さんになる」と言い合っていた。

それは小学校、中学校と成長する中で影を潜めたが、特別に仲良しという関係は続いていた。

しかし、それも高校進学をきっかけに、ますます疎遠になる。

美琴の通う相模原高校は、かつては女子高だったが、彼らの入試の年には既に共学となっていた。

小学校の頃から剣道に勤しんできた彼は、中学の頃に県ベスト八になれた。そのこともあってか、運動部に力を入れている山陽高校を選んだ。共学になったばかりの女子高で、自分の力が活かせるはずがないと思っただからだ。

それは確かにそうなのだが、問題なのがこの恋わずらい……。

最初の一年は何もなかった……、いや、兆候はあった。

入学当初の春は一緒にお花見に行き、進学という環境の変化のなかでのストレスを癒しあう仲であった。

徐々に学校に慣れ始め、すれ違うことも増え始めた二人。それでも夏休みには一緒に海に行ったり、夏祭りの夜を過ごしたりもした。

濃紺の布地に咲き誇る朝顔の浴衣。髪をアップにさせた彼女は、金魚を追いながら、その汗でしっとりとしたうなじを見せてくれた。嬉しそうに水ヨーヨーを弾く彼女は、彼の頬についた綿飴を摘むと「甘い」と言った。

冬のある日、もこもこした白いダッフルコートを着た彼女と待ち合わせをした。映画館で見たラブストーリーに涙する彼女を照れ隠しでからかったのは失態。

相模神社の石段を上って五円を放ったあと、彼は自分の心の中で固まりつつある気持ちに気付いていた。

振袖姿に紅を引いていた彼女。

桜色も良かったけれど……。

何が？

なんでもない。

剣道の時合なら、一直線に突きだせる。なのに、彼女の笑顔、切れ長の目が目じりを上げ、窺うように覗き込まれたとき、彼は逃げた。

彼女からも、気持ちからも……。

四月を迎えた二人は、桜の下を共に歩かなかった。

試合を控えていたことと、後輩の指導にあたったこと。

それを言い訳に、彼は彼女を避けた。

会いたいくせに、逃げた。

その心の弱さを振り切るために、竹刀を振るった。

五月の新人戦。

彼は彼女に応援してくれるようにメールをした。

彼女は久しぶりの誘いに喜んでくれた。

けれど、市の体育館に彼女ま姿はなかった。

彼女の親戚の不幸が重なったため、来られなかったそうだ。

そのおかげなのか、邪念の無い彼は見事準優勝を果たした。

彼を称えた盾は、今も机の引出の中にしまっている。

梅雨の頃、彼女からメールが来た。

喜び急いで携帯を開いたのだが、そこには進学に悩む旨のメール。

高校二年。大事な時期。

頭ではわかっていているものの、一人盛り上がっていたことと、五月の裏切りが重なり、彼はつまらない返事をした。

『美琴の人生なんだし、自分でしっかり決める。俺はお前を信じている』

幼心に結婚を約束したことも、今は遠い昔のこと。

そして七月の頃、ついこないだのことだ。

彼が部活の帰りで遅くなったある日、江成家の前で美琴と彼女の母、それに知らない男が談笑していた。

暗がりによく見えなかったが、着こなされていない上下のスーツにオシヤレな眼鏡、第一ボタンの外れたワイシャツでは、とても社会人とは思えない。

彼は彼女達に会釈をすると、江成家を後にした。
すれ違うとき、香水の匂いがしたのを覚えている。

誰？

あら、悠。部活？ 大変ね。

誰？

先生？ ウチの家庭教師だよ。菅原牧夫さん。大城大学まんなんて。

ふうん。

うん。

なあ。

あんね。

なんだ？

そっちこそ。

美琴から言えよ。

うん。 あんね、大城大学受けるつもりなん。
大城大学ねえ。 お前ならもつといいところねらえるんじゃないの？

うん。 でも、決めたん。 牧夫さんの話を聞いたつたら、なんやかつらやましいなつてきたん。 ウチ、がんばるね。

その、牧夫つて奴が楽しいんじゃないの？

何その言い方。 感じ悪いわ。

わりい。 俺疲れてつから、んじやな。

ちよつと、悠つてば！ 話はいいん？

ああ、また今度……。

まったくもう……。

振り返ることなんてできない。 あの日の彼は、玄関で姉の志保とすれ違つたとき、「あんた大丈夫？」と心配されたくらい酷い顔をしていたから。

時計が六時半を指そうという頃、あの男がやってきた。

グレーのワイシャツと黒のスラックス。 整つた髪形は見間違えるはずがない。

彼がインターフォンを押すと、しばらくして彼女が出てきた。

美琴は笑顔で彼を招き入れると、男が後ろ手でドアを閉めた。

やがて二階の彼女の部屋の明かりが点く。

雄はいけないことと知りつつ、ブラインドの隙間からその様子を見ていた。

机に向かう彼女と、その脇に立ち指導する彼。

参考書を指差す彼女に、彼は膝立ちで同じ視線になり、親身になつて教えているのがみえる。

時に談笑を交え、軽く彼女をあしらい、笑い合う姿。

階下で母親が夕食の準備を告げるまで、悠はそれを見ていた。

箸を伸ばしながらぼんやりと考える。

家族の会話もテレビの雑音で紛れ、没頭するには十分な環境だった。

自分がしていることは明らかな覗き行為。

倫理に反している。

精神衛生上、悪影響を及ぼす。

けれど、やめられない。

あまりに気になった彼は、彼女と同じく相模原に通う同窓生に尋ねたこともあった。

井上京子。彼女とは中学からも一緒であり、美琴との共通の知り合いだった。

学校での彼女の様子に変化はない。彼氏がいるようにも思えないが、最近大人びたのも確か。それと、この前に風紀の先生に呼び止められて小言をされたとかも。

遊んでいるかも？

容姿、口調、立ち振る舞いから、中学の頃同級生にお公家様とか、美琴の君とからかわれた彼女だが、別段真面目というわけではない。

ドラマや流行を追うこともあるし、音楽のジャンルも男性アイドルユニットが大半。

つまり、普通の女子高生。だから、年相応に背伸びしたりするのも、ごく自然なことではしかない。そもそも、美琴と悠はただの幼馴染の仲。家が向かい同士で、たまたま仲が良いだけで、将来を約束したわけでもない。

彼女が自由意志で誰かと恋仲になったところで、それをとやかく言う資格は誰にもないのだから……。

夕食を終えた悠は、濡れた髪をクシャクシャタオルで拭きながら自室に戻る。

既に家庭教師は帰ったであろう時間。美琴の部屋には桃色のカーテンが敷かれ、部屋の様子はわからなかった。

彼はベッドの上に投げ捨てていた鞆から英語の教科書を取り出し、明日の予習を始める。

彼女のことは気になるが、英和辞書に向かっていている間はそれも忘れることができるから……。

山陽高校の柔剣道場では、気合の籠った掛け声が行交っていた。

悠もまた練習に勤しんでいたが、最近は上の空なことが多く、つい最近も顧問の大谷に叱られたばかり。

そして、その日も……。

「！？」

稽古の最中、道場の隅で髪を結わえていた女子部員を見たとき、彼は気を取られていた。

次の瞬間、頭に衝撃を受けた悠は、バランスを崩した拍子に無様にしりもちをつく。

畳の上のおかげでそれほど痛くないが、面を打ち込んだ後輩の田丸弘樹が驚いて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか？ 先輩！」

「なに、たいしたことないさ……。いやいや、お前も強くなったな。うかうかしてらんねえ……。」

軽口を叩いて誤魔化す悠だが、弘樹は納得がいかない様子で面を取り、複雑な表情で彼を見ていた。

「なんだよ。まだ練習終わってないんだから……。」

「でも、先輩……。」

「うつせーつての……」

悠は竹刀で後輩の頭をポンと叩くと、言葉とは裏腹に防ぎを外す。「先輩？」

「すまん、なんか頭痛いから帰るわ。大谷にはよろしく言っとな」

隅っこで邪魔にならないように黙想を行い、道場に一礼をしてから部長に早退の旨を伝える。

悠は更衣室に行くと、そそくさと制服に着替えた。「俺、何やってんだろ……」

精神の修養を目指す武道において、心を乱したまま立ち去る自分。こればかりは草津の湯でも癒えないものと言いつつ、唇を噛んだ。

* * * * *

いつもより早い帰宅時間に、悠は寄り道をしていた。

相模原駅内のショッピングモールを久しぶりに歩くと、その様変わりに驚いてしまう。

少し前に美琴と歩いたときは、コンビニエンスストアを大きくしたようなキオスクとクリーニング店がある程度だったのに、今では雑貨屋や本屋、ブティックまで入り込んでおり、近くのデパートとも連絡通路で繋がっていた。

ファンシーな雑貨屋は店内からはみ出すほどに商品を飾っており、行き交う人とすれ違いざま、カゴに詰まっていたぬいぐるみを落してしまう。

白くてふわふわした毛並みの犬のぬいぐるみ。

丸いボタンの目と独特のもふもふした手触りに、しばし楽しんでしまう彼が居た。

値札を見ると、煎五百円の六割引。品薄現品限りのそれに妙に心が動くのがおかしかったが、袖振り合うも他生の縁と、どうあが

ても無生物なそれをレジに持っていく。

店員に贈答用と聞かれたので頷くと、サービスでラッピングしてくれて、ついでにリボンもつけてくれた。

レジを後にして、手元にあるそれをどうすべくかしばし悩む。

手触りも見た目も悪くないけれど、男子高校生の部屋にぬいぐるみを置くことに抵抗がある。志保にわたそうかと思っただが、誕生日はまだ先だし、いきなりわたされても気持ち悪がられるのがオチだ。「……これなんかどうかな……」

「……え？ 似合います？」

逡巡している彼の耳に、聞きなれた声が届いた。

雑踏の中に居てどうして聞き取れたのか？

空耳と願いつつも、視界には見慣れた彼女の姿を見つける。

ひらひらしたフリルの目立つキャミソールを身体に当てて、あの男に笑いかけている。

その光景は、竹刀の一撃など問題にならないほどの衝撃があった。がくつと膝から力が抜け、頭が重くなる。そのまま倒れてしまえばどんなに楽だろう。けれど、騒ぎを起こして気取られてはいけなさと、気力で奮い立つ。

「先生はこういう女の子らしい恰好が好きなん？」

「そういうわけじゃないけど、美琴ちゃんに似合うと思うよ……」

「めっちゃうれしいですわあ、うち、そんなことゆうってくれる男おらんし」

細目が嬉しそうなカーブを描くのが見える。少し前に彼にのみ見せていたであろう笑顔が、今は別の男に向けられている。

これ以上見てはいけない。ブラインドもないのだから、気付かれるのは時間の問題。二人が着せ替え人形のように洋服を楽しんでいるうちに逃げるべき。

情けない気持ちを抱えたまま、悠は反対方向へ逃げようとする。しかし、

「あれ？ おーい、悠、はるかかなたにいるん、悠くん！」

逃げようとしたところで、気付かれてしまい、彼女のよく通る声が彼を捕まえる。

しばし固まる。その間も自分を呼ぶ声がどんどん近づいてきて…。

「どうしたん？ 今日は何活ちがうん？」

人差し指でぐりぐりとわき腹を突きつつ、前のめりなって彼を上目遣いに睨んでくる美琴に、やはり気持ちが昂ぶる。

「おまえこそ、なんで居るんだよ……」

「ウチは先生と一緒に参考書選んでたんよ。推薦とか無理そうやし、今からがんばらんとね」

ぐつとこぶしを握り、えへんと胸を張る。少し前までは目立たなかったそれも、最近はブラ無しではしまりが悪いらしく、夏服の上から青いそれが見えた。

思わず唾を飲む。彼女の女としての成長は認める。そして、あの男は週三回程度、間近で見ているという事実には思い当たる。

「どしたん？ 難しい顔して……」

彼女は彼のよこしまな視線に気付かずに、不思議そうに首を傾げる。ふるつと揺れるポニーテールは、おそらく赤の髪留めで止めているはず。

「おい、美琴君。だめだよ、いきなり走っちゃ……」

ゆっくりと歩み寄るその男は、悠に気付いて軽く会釈する。

「先生、初めてよね。この子、悠ね」

「君が悠君か。てつきり女の子かと思ってたけど……」

さわやかな笑顔だが、オシャレなデザインの眼鏡の奥はそうでもない。

「初めまして」

返す悠も軽く頭を下げるものの、視線は外さない。まるで試合中のように、相手の一挙手一投足見逃すまいという鋭いモノ。

「それじゃあ美琴さん。行こうか」

「え？ でも、ちよい待ってほしいかな。悠とも久しぶりやし」

二人を交互に見る彼女。その間に何かがあるのかなど理解できず、眉間に皺を寄せる。

「僕達は遊びに来てるわけじゃないんだ。今日は参考書を選びに来た。そうだろ？ 悠君とはいつでも会えるんだし……」

「うう、先生、厳しいなあ……」

しよげた感じの美琴だが、彼はあくまでも家庭教師。彼女もしぶしぶ頷く。

「ごめんなあ、悠。また今度……」

「ああ、また今度……」

視線を美琴に移した悠は、思い出したように瞬きをする。

「それじゃ」

男は彼女の肩に手を回すと、そのまま今来た道を戻る。

歩きざま、男が彼女に笑いかけていたが、それはまるで……。

「おい、美琴！」

叫んで駆け出していた。

「ん？ なあん？」

振り向く彼女は男の腕も払わず、やってくる悠を待つ。

「えと……」

昂ぶる気持ちのまま、暴走したことを後悔する。脂汗を拭う手が何かを思い出す。

「これ、この前わたせなかったから……」

先ほど買ったばかりのラッピング済みのぬいぐるみを彼女に差し出す。

「え？ なんなん？ ぶれぜんと？ へえ、めっちゃうれしいわあ」

彼女は中身も確認せず、ころころと笑っていた。

「美琴さん」

「あ、はい。それじゃね、悠。今度お礼すんね……」

「ああ……」

再び遠ざかる彼と彼女達。

参考書を買うのなら向かうは本屋。けれど、その方向は逆方向。

帰り際、道に迷った悠が現在地を確認したところ、見つけた真実だった。

遠回りをしていたせいで、帰る頃には六時を回っていた。

江成家を見上げるも、まだ二人は帰っていないらしく、美琴の部屋に明かりはなかった。

悠は「ただいま」も言わずに階段を駆け上がると、そのまま自室のベッドにダイブした。

帰宅に気付いた志保が「ごはんだよ」と声をかけてくれるが、「今気分悪いから」と仮病を使う。

確かに気分は悪い。

生まれて初めて味わう気持ち。

親しい女友達が、幼馴染が知らない男と肩を並べぶ歩いていた。参考書を探す？

ブティックで？

服、それも下着のようなものを似合う？ 似合わない？

夏服のブラウスは第一ボタンが開いていたような……。

肩に腕を回していたことを拒まないのは何故？

家庭教師と教え子。

全てが気持ち悪い。

不快だ。

嫌悪するに値する。

けれど、

俺にそんな資格があるのか？

ただの幼馴染。

友達以上の関係に過ぎない二人。
最近では電話もメールも疎か。

もし、彼女があつた男に好意を抱いていたとして、またはその逆としても、それは自由恋愛の中で許容されること。

彼の中に渦巻くものは、ただの嫉妬。普通の人間の持つ、ごくありふれた心の一面。

失うことに慣れておらず、比重がやや大きいだけのことで、時が経てば癒える傷。

とくに食欲は素直で、日の沈んだ暗がりの中、ぐうと音をさせて胃を締め付ける。

彼は起き上がると、伸びをする。

電気をつけたあと、立ちくらみと蛍光灯の光で目が痛い。

そして、

ん!?

窓の外に見えたもの。

いつもの癖でブラインドを下ろし、明かりも消す。

窓の隅っこで、おそろおそろ道路を見る。

ブラウス姿の美琴と、例の男。

肩を抱く手はモールで見たとときと一緒。そして、彼女が寄り添っているようにも見える。

唾を飲もうとすると、渴いた喉が痛くなる。

見開いた目はやはり瞬きを忘れていた。

玄関を入り、数秒して向かいの窓の電気が点く。

いつものように机に向かう彼女と男。

けれど、何かに気付いた男は、窓に歩み寄り、薄桃色のカーテンを閉めた。

なっ！

明らかな挑発行為に、体温が瞬間的に二度上昇する。

しかし、今の彼にできるのは、カーテンを見つめるだけ。

手近にあった鉛筆を握る。痛みとミシミシという音が聞こえた。

薄い統色のカーテンがふっと暗くなる。

淡い白熱灯の明かりが漏れるだけになった。

ペキ。

折れた。

何もする気になれない。

悠は、ただ机の前に座り、頭を抱えていた。

時計は既に十時を回っている。

部屋から漏れる明かりが蛍光灯に変わっていた。しかし、彼の部屋は暗いままだ。

男は帰ったのだろう。けれど、間違いなく彼女とあの部屋に居た。

その現実と、薄桃色のカーテンのから漏れる光の弱さが、彼を狂わせた。

ぶー、ぶー、ぶー……。

背後で彼の虚をつくかのように音がした。

低い振動音はメールの着信音。

悠は鞆から携帯を取り出すと、スライド式のそれを起動する。

誰から……、美琴？

メールは美琴からのもの。よく考えれば彼女くらいしかメールアドレスを知らないはずで、家族なら階下か隣の部屋にいるだろう。

なんだろう。

焦る気持ちを抑え、ゆっくりとメールを開いた。

彼女は誰かの彼女

件名：ありがとねo(^v^)^o

悠からプレゼントもらえて嬉しいわぁ〜(ハート)

最近冷たいから、もううちのこと嫌いになったんかとおもったわ(

T^T)

これからは大事にしいよ？ 女友達なんて、後で後悔したっておそ
いんよ

.....

内容は簡単にプレゼント嬉しかったというものだった。

顔文字と数行言葉に、悠は安堵と安らぎを感じていた。

件名：Reありがとねo(^v^)^o

最近は試合も無いし、まったりと部活してるよ。そっちこそ勉強は
忙しい？

俺は.....

打ち終えて待つこと二分、その間もメール問い合わせを三十秒こ
とに行く。

そして着信振動。

メールには勉強のことや近況が書かれていた。

美琴は何も変わっていない、自分の知る幼馴染。

全ては取り越し苦労であると感じた彼は、今から夕食を食べると
返したあと、部屋を出た.....。

*** **

十月の始めの頃には、メールフォルダに五十件以上たまっていた。全ては美琴とのやり取りだ。

彼女は家庭教師が始まる前と終わった後にメールをくれた。

相変わらず密室の彼女の部屋からは、白熱灯の弱い光が漏れるだけだったが、電子メールが繋ぐ絆がある。

悠はこれまで以上に部活に打ち込み、近く、大会に備えていた。

件名：体育の日

体育の日、試合があります。応援よろしく！

俺、マジで優勝狙っていくよ。

だから、美琴にも……………

少し前なら面と向かって応援を頼んでいた頃に比べると、やや弱い誘い。けれど、受験に向けて必死になっている彼女。今は疲れているであろうと、メールに気持ちを託すことにする。

そういう優しさを配慮できる自分は大人とほくそ笑み、送信を押す。

二分、三分、五分……………。

志保の「お風呂でたよ」の声に、悠は替えの下着を手にした。

*** **

雑念を振り払った彼に敵は無い。

新人戦のときは惜しくも敗れた相手にも、悠は怯まず果敢に攻め、相手の胸を払う一本勝ち。

大谷は彼の快拳をおおいに称え、ささやかながらファーストフー

ド店で祝勝会を開いてくれた。

「それじゃ、高槻の功績を称えて、かんぱーい」

「かんぱーい」

部員一同、手にした百円シェイクをかふかふと交わす。

気の抜けた音に苦笑が漏れつつ、皆口々に今日の試合内容を振り返っていた。

ただ……、

主役であるはずの悠は鞆片手にトイレに走ると、急いで携帯をチエックしていた。

試合会場に彼女の姿はなかった。くまなく探したわけではないが、いつもなら見えるところにいてくれたはずなのに。

メールフォルダを調べると、最後に届いたメールは「明日がんばってね」という簡素なもの。

そこには「来る」とも「行けない」とも書いていない。

その前のメールを見る。

学校のことや、最近のドラマ、ニュース、漫画、雑誌、芸能人にアイドルグループ、全て他愛の無いことばかり。何も不自然さはない。

しかし、送信メールと照らし合わせると浮かび上がる。

彼女は自分の問いかけにほとんど答えていない。

いつでも言葉尻を濁し、明確な返事をせず、「オヤスミ」で締めていた。

予測変換で打たれる顔文字と似通ったものいい。句読点が少なく、改行と誤字だらけの内容は、最近になるにしたがって酷くなる。

おざなり。

その一言に尽きる。

彼が便器の上でコメカミを押さえていると、誰かがやってくる。

「先輩……、高槻先輩？ 大丈夫ですか？」

弘樹の声に、はっと気づく。

「あ、ああ、悪い。なんか下痢が酷くつて。やっぱり緊張かな？ ははは……」

上ずった声を返す悠に、弘樹は無遠慮にドアを開ける。

「やっぱり……」

思いもしないことに素で驚く悠。

「お、おい！ 今プレイ中だったらどうすんだよ」

「なんか変だと思ったんですよ。練習中とか変にテンション高いし、メールの音とかに怒らないし……」

「なんだよ、そんなこと……悪いかよ」

「おかしいつす。絶対」

「なんでもないつての」

「おかしいつす」

「なんでもない」

双方譲らぬ言い合いに、また別の声がある。

「なになに？ 二人でトイレとかボーイズラブですか？ 二種類の意味で不潔ですう」

楽しそうに声を上げるのは、女子部員の滝川和子。百五十センチに満たない身長の子供、弘樹の後ろでびよんびよん跳ねており、さらに嬉しくない解釈をしてくれる。

「なんでもないから和子ちゃんは黙ってて……」

「ああん、田丸君ではひどい、さっきまでおかしいつすおかしいつす言つてたくせにい」

「いや、そうだけど、和子ちゃんはなんでもかんでも変な目で見たがるから……」

「だってえ……、剣道部の先輩後輩、トイレでああ〜なんてそうそうお目にかかれるものじゃないでしょ？ 少しくらい妄想してもバチはあたららないもん」

頭の痛いことをべらべら語る和子に悠も困り気味になる。それだけでなくとも狭い場所に三人もいたら暑苦しい。

「一度戻るか」

「はい。けど、先輩、何があつたか話してくれますよね？」

妙につつかかる後輩に、やはり和子は色眼鏡をかけていた……。

＊＊

離れた席に移動した悠達。ポテトを摘む和子は、あまり興味なさそうにウインドウの外を見ていた。

「先輩、携帯見てましたよね……」

「悪いかよ……」

「女子高生じゃあるまいし、トイレで携帯とかありえませんか」

「いいだろ、男子高校生なんだし……」

「彼女ですか？」

「ぐっ……」

「そうなんだ」

「うっ」

ずかずかとナイーブな領域に踏み入る後輩二人。

いつもなら軽くないなしているのだが、かすかに芽生えた気持ちのせいか、それができず、むしろ相談したい気持ちすらあった。

「別に、いいじゃないか……、彼女のことでも……」

「そうですね」

「でもそこには田丸君の嫉妬があるの……」

「ありえ」

「ない」

即座に否定されてブーイングする和子。

「ふられた……」

「……」

「好きな人が別にできた……」

「嫌いになった……」

「……」

「浮気……」

「……!？」

「嫌われた……」

「……」

「……冷たくなった？」

「……」

きわどい単語の応酬に、悠は唇を噛む。しかし、彼の変化はしつかりと観察されており、

「大槻先輩、浮気されたんですか……、チャンスですよ、田丸君」

弘樹はぼんと肩を叩く彼女の手を取ると、真剣な顔をして継げる。

「俺は和子ちゃんが好きだからそういうのは無いの」

「え!？」

虚を突かれた和子は絶句して、見る見るうちに顔が真っ赤になる。

「それより、どうなんです？ 彼女は浮気してるって証拠とかあるんですか？」

唐突な恋愛劇にも関わらず、弘樹は悠にだけ焦点を向ける。「いや、別に付き合ってるわけじゃないし、浮気というわけじゃ……」

「まさか、先輩が浮気相手ってわけじゃないっすよね？」

「いや、というか、付き合ってるとかそういうのもわからない……」

「片思いですか？ にしては、なんかダメージでかそうだったっす。

トイレでの先輩」

妙な枕言葉に首を傾げなくなるが、彼自身、どうなのか、一度整理したくなる。

「そうだな、俺は彼女と……」

悠と美琴の関係。

お向かいさんで幼馴染。

昔は結婚の約束もしていたけれど、最近は疎遠。

よくある普通の話。

それをかき回したのが、大城大学に通う家庭教師のあの男。

最初は普通に勉強を教えているだけ。

しかし、出会った後は、カーテンを閉められ、さらに電気も白熱灯のみ。

他人の家を覗き見たことは気持ち悪がられたが、恋愛感情ゆえま暴走してもらった。

そして、最近始まったメールのやり取り。

最初に異質さに気付いたのは和子。

メールで「ある仲間達」とやり取りをする彼女は、癖とでもいっべく予測変換をすぐに見抜いた。

「厳密に言つと、浮気じゃないですね……」

「そうだよな……」

一通り話し終えたあと、悠は視線を下げて手で額を拭うようにする。

「でも、変ですよね……。そういう嫌がらせチックなこと始まったのつてえ、先輩と家庭教師さんが会ったところからですよ？ どうしてです？ 何か他に隠してることはありませんか？」

恋愛の話から、やや生臭い話へと変遷すると、いつの間にか彼女の声がソプラノの作り声からアルトの声に下がる。

「いや、思いつかないけど……」

「嫌がらせねえ……」

「うん。私なら、異性の幼馴染ぐらい友情の範囲で許容しますよ」

「だよな。なんか先輩、他にありませんか？」

「えと……」

メールをもう一度見直す。

「そういえば、何かプレゼントしたんですか？」

「ああ、犬のぬいぐるみ……」

「へえ、やるうー！」

「いや、なんか気になって買っただけで、プレゼントするつもりとかじゃないんだ。そのときは頭にきてて、そいつの前で彼女に渡した」

「え？」

「え！？」

「え？ なんかまずい？」

ふざけ半分に聞いていた和子も、弘樹と同じように素の表情で悠を見る。そのリアクションに、悠も何かおかしいことを言ったのかと慌てて聞き返す。

「いや、だって、先輩、その時二人って、ブティックの前で服選んでたんでしょ？」

「ああ」

「それって世間でなんて言うか知ってます？」

「買い物」

「「ちよーつぶ！」」

二人がかりでの手刀を脳天に叩き込まれた悠は、別の意味で頭を押さえる。

「それが原因ですよ！ ドアホ先輩！」

店内に響く声に、視線が一瞬彼らのほうへ向く。

「いや、だって、ただプレゼントしただけ……」

「あんたさっき自分で言ったでしょ。買い物してる二人を見て腹たつたからプレゼント渡したって！ それ挑発っすよ」

「でも、彼女だって喜んでくれたし……」

「でもじゃないですよ……、あれ？ でも変ですね？ 犬って言いましたよね？」

やれやれといった様子の和子だが、何かに気付いた様子で悠の携

帯を指差す。

「メール読み直してください……」

悠はメールを見直すと、やがて、鈍い彼も気付く。

彼女のメールには、プレゼントをもらったことの感謝はあっても、
犬や、ぬいぐるみという言葉は無い。

つまり、それは……。

「くすん、ぬいぐるみに罪は無いのに……」

「嘘……」

あのと、既に二人が付き合っていたのなら？

幼馴染とはいえ、特別な日でないのに突然のプレゼント。お菓子
やジュースのような一過性のもでもなく、形として残るもの。そ
れは邪魔物に他ならない。

「電話つて、今できます？」

「いや、できるけど……いいのかな……」

「それを確かめるためです……。ついでに試合のことでも報告すれ
ばいいじゃないですか」

「そうか、それもそうだな……」

震える手で操作する。半年近く電話でやり取りをしていないせい
か、リダイヤルから探すことはできない。アドレス帳を開いて探し
たあと、しばらく通話ボタンを押せなかった。

「先輩、怖いんですか？」

「ああ……けど……」

後輩の叱咤にようやく決心が固まる。

つ、つ、つ……とうるるるる……とうるるるる……。

「はい、どっぴおです……」

「うるさい」

和子をポンと叩く弘樹。渦中の悠は繋がらないことに安堵すべき
なのか、それとも不安になるべきなのか複雑な心境。

一方で、もし付き合っているのなら、それを邪魔することはまか

り通るのだろうか？

むしろ、彼女の恋愛成就を祝うべきなのではないか？ 今日の日を勝利で凱旋したことを、きっと彼女が祝うのと同じように……。

ふっ……。

繋がった。同時に気持ちが悪さをきる。

「もしもし、俺、悠だけど、美琴？」

『あ、うん……えと、何かな？ いまちょっと手が離せないの……』

「そう？ あのさ、聞いて欲しいんだけど……、俺、今日の大会でさ……」

疑念を払拭してくれる彼女の声。背後では気取った音楽が聞こえるが、どこかの店内だろうか？

『……あつ……ちょ、ん……だめっ』

「もしもし？」

上ずった声があった。そして、耽かの存在感。受話器の遠くにいるそれは、ゴボボというノイズに紛れて、舌打ちのような音を出した瞬間、指がすべる。ぴつと高い電子音がした後、悠はゆっくりと話す。

「美琴、今どこにいるの？ なあ……、美琴？」

『……つと、だめよ……は……でえ……ね？ ……とで……』

「なあ美琴？」

『ごめん、ちょっと今友達待たせてるから、後でね……』

「おい、美琴……」

『……』

通話時間二七秒。

途切れた会話は、リダイヤルを押しても通じなかった。

「先輩、どうでした？」

「ああ、友達と居るみたいなんだ……」

「そう？　ですか？　なんか変ですよ？」

「いや、なんかほっとしたら気が抜けて……。悪い、もう帰るは。変なことにつき合わせて悪かったな……」

「先輩？」

「すまん、もういいから……」

とぼとぼと祝勝会の席に戻る悠に、二人は声を掛けることができなかった……。

彼女の彼氏

帰り道、悠は携帯を耳に当てて、再生ボタンを押す。十八秒後にもう一度、もう一度、もう一度……。

ノイズ交じりの声。聞きなれたはずの美琴のそれは、上ずり、高く、色合いを彼の知らないものとしていた……。

友達と居ただけかもしれない。

彼女がそう言っていたのなら、それを信じてあげてもよい。

所詮は他人同士、いつかは別れの来る関係なのだし、今がその時期。

来年はお互い受験がある。

彼女は地元の大城大学。自分は、剣道の強い大学を探せばいい。

県外で。

学力に自信が無いが、今日のような成績を残すことができれば、きっとどこかにもぐりこめる。だから、問題ない……。

自然と溢れるモノを、悠は上を向いてしのいだ。

「あら、ハルちゃん……、お帰り……。今日の試合どうだった？」

玄関をくぐるうとしたところで呼び止められる。相手は向かいの江成さん。美琴の母、恵子だった。

「え？ あ……、はい！ 今日はずいっすよ！」

慌ててリュックから盾を取り出す悠。敵かな想定のそれは、参加賞でないことぐらい一目でわかる。

「すごいわね、ハルちゃん。優勝？ したの？」

「ええ。まぐれですけどね……」

まぐれで優勝できるはずもないが、謙遜の言葉を他に知らない彼は、それしか言えず、頭を掻いていた。

「そういえば、美琴は？ ハルちゃんの応援に行くって早くに出ただけ、一緒じゃないの……」

「え！？」

突然大声を出す悠に恵子も一緒になって驚く。

「べうしたの？ そんな大きな声だして……」

「いえ、あ、ああ、美琴なら友達と用があるからって、だから、別になつて、それで……」

「ふうん。そう……」

どこか納得いかないといった恵子だが、話題を膨らませまいとする悠は一礼すると、門をくぐる。

玄関を開けて、階段を駆け上がる。

汗で湿ったシャツも気にせず、彼はベッドに飛び込むと、声を上げずに泣いていた。

おそらく二人の予想通り。

慌てた意味も理解できる。

彼女がどこに居たのかはわからない。

けれど、誰と居たかはわかる。

それは辛いことだが、耐えるべきこと。

しかし、辛いのは別にもう一つ。

彼女が嘘をついたこと。

自分にではなく、自分を利用して嘘をついたこと。

それを知ってしまったことを呪う。

首を突っ込んできた弘樹？ 和子？ 真実への道筋を立てた恵子

を？ それとも元凶であるあの男？

違う。

憎悪の向こう側に居るのは、美琴。

涙が溢れる。

とめどなく。

それは枕を濡らす。

叫べば紛れるかもしれない。

けれど、悟られるのが怖い。

自分勝手な失恋は、罅割れた気持ちの隙間にしまっておきたい。

誰にも言わず、いつか笑える日が来るまで……。

* * * * *

「おら、もつと気合いれろ！」

「おつす！ 先輩！」

怒声に似た掛け声が行き交う剣道場。

同部の快拳は既に他の生徒の知るところにもあり、放送部や写真部、新聞部などがヒーローを求めてやってくる。

それも相成つてか、試合が終わって初めての部活は、非常に活気のあるものだった。

道場の隅で取材を受ける悠は、ぎこちない作り笑いでインタビューを受け、快拳を表彰する盾と賞状を手に、フラッシュを浴びる。

午前中はというと、クラスメートからなんやかんやとはやし立てられ、中には脳い視線を向ける女子もちらほら。

道場の周りにもミーハーな女の子が多く、マネージャー希望と言っていたが、部員兼マネージャーの和子が、年季の入りすぎて異臭を放つ防具を片手に追い払っていた。

女子数人から睨まれていたが、彼女としてはむしろ善意だと話していた。

そういえば、二人とも仲いいな……。

昨日の唐突の告白のあと、その後は見ていない。

ただ、今の雰囲気から、ただのお友達というわけもなく、何かあったのだろうと邪推してしまう。

昨日は散々いびられたし、このツケはでかいぞ……。

悠が竹刀を握り直すと、パチパチシャッターを切られる。

「こっち見てください。もう一枚いきます……」

アナログなカメラとデジタルカメラを交互に使うカメラマンは、真剣な表情で臨んでおり、むしろ彼のほうが気負ってしまう。

「……ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。これで入部希望者が増えるといんだけど……」

「そうだね。でも、なんかこう、華が無いから」

「おいおい、言うなよ、そういうこと。たしかに剣道って地味だけども……」

「いや、被写体がさ」

「被写体？ 俺？」

「うん。なんか思ってたのと違うんだよ……」

面と向かって華が無いといわれるのはさすがにカチンとくる。精神修養なんのその、悠は彼を睨みつける。

しかし、当のカメラマンは飄々としており、さらにカメラを向けるので、悠は反射的に笑顔を作る。

「それ！ それがなんか違うんだよね。なんかさ、高槻君、作ってない？」

「何を？」

悠は、一瞬、怒りも忘れてぎよっとする。級友達にもばれていないはずの内面が、初めて会った写真部の彼に見抜かれる。それほど自分はわかりやすい性格なのかと悩んでしまう。

「いや、何をもって言われるとわかんないんだけど、でも、写真ってそういうのわかるよ。ほら、結局写真って一瞬を保存しちゃうでし

よ？ だからさ、波みたいな感情とかも全部固めちゃうんだよね……」

「波みたいな感情を固める……」

「雰囲気そのまま保存するっていうのかな？」

それはおよそ精神統一とは違うこと。怒りや嫉妬、悲しみ、欺瞞に蠢く彼の気持ちは常に波打っている。

それは否定しない。

そして、ファインダー越しにそれを見るカメラマン。

彼はその一瞬一瞬を脳裏で現像しているのかもしれない。

そこに浮かび上がる自分は優勝の盾で素顔を隠す、惨めな泣き虫なのかもしれない。

「そういや、名狙聞いてなかったな。俺は……、もうわかってるか」

「僕は写真部の佐藤、佐藤重明ね。二年三組ね。大槻君とは多分、

今日が初めてかな？ 話したの」

「ああ、多分」

おそらくこんな機会でもなければ接することも無いのだろう。

ただ、彼のいう言葉に、悠はなぜか興味を持ってしまっていた。

「今度、写真の撮り方とか教えてくれよ……」

「え？」

「なんとなくさ、気になって……」

写真に興味があるわけではない。重明が打ち込んでいる写真に興味がある。彼はファインダー越しにどのようなものを捉えているのか。それが知りたい。

「いいけどさ。気が向いたら部室に来てよ。木曜なら遅くまで現像室に居るし」

「ああ、多分いく。うん、きつとな……」

「そのときは珈琲ぐらいだすよ」

手を振りながら去っていく彼。その前にせっかくだからと、女子部員達にパシャパシャとシャッターを切っていたので、そのうちそれも見せてもらおうと誓う悠だった。

後輩の彼女

道場を出る頃は、既に日も暮れていた。

秋を飛ばして冬を実感させる風に、悠は身震いをする。

鍵を職員室に持ち帰るのは本来部長の仕事。けれど、最近はずばら悠がしていた。

最後まで道場に残り、型稽古を三十分、柔軟体操十五分、他に黙想三分を加えての一時間近くの自主連をしているのだ。

次の試合にかかる期待感と、来年の推薦のため。

周囲にはそう伝えていたが、本当は時間を潰すため。

今から帰るのなら、時間的に八時を回る。

煩惱を抑えるには、それ以外に方法を知らない悠の苦肉の策であった。

さてと、帰ろうかな……。

自転車置き場からすい〜っと走り出す彼。そこへ突然黒い影。

「じゃじゃ〜ん！ 敏腕マネージャー登場！」

「うわっ！」

慌ててブレーキを踏んで後輪を滑らせる。

「あぶないじゃないか！ どこに目をつけてるんだ！」

「ここにパツチりおめ目が二つあります」

聞き覚えのある声は、暗がりの中での小さなシルエットと相成って正体がわかる。

「和子ちゃんか。いつたいなんのよう？ 弘樹は？」

「えと、弘樹君とはさつき別れて……」

「それで？」

「あの、もしよかったら送っていきなさい」

「そついうのは弘樹に悪いだろ？ だめだよ」

浮気というほどでもないにせよ、自分の好きな子が別の男と歩く

など、許せるはずがない。特に今の悠には痛いほどわかることであつた。

「お願いします。先輩、相談したいことがあつて……」

「相談？ 弘樹じゃダメなの？」

「弘樹君だと都合が悪いんです……」

いつに無く神妙な態度の和子はやや不気味。それでも恋人である弘樹にすら話せないこととなると、悠としてもそう無碍に断ることはできない。

「わかつたよ。少しだけな」

十月の暮れ、夜も更けているこの頃に女子を一人帰路に着かせるというのも気が引けた悠は、彼女に荷台に乗るように向ける。

「すみません……」

やはりいつもと違うしおらしい態度に、悠は首を傾げてしまう。

「じゃ、いくよ」

悠は、ゆっくりと自転車を漕いだ。

「和子ちゃん、家はどっちのほう？」

「先輩と同じほうです。というか、中学一緒でした」

「そうだった？ でも、剣道部は……」

中学時代を思い出すと、確か女子剣道部は部員が少ないせいだ、男子と合同であった。それは高校に入っても同じだが、同じ中学なのに思い出が無い。

「はい、剣道は今年から始めました」

「へえ、そりやまたなんで？」

記憶違いではないとほつとする。その後は世間話のつもりで話を振る。

「えと、護身ですかね？」

「そうなんだ。でも、今は弘樹が守ってくれるんじゃないの？」

「ですけど、ちょっと言いにくいことがありまして……」
「へえ……」

それがおそらく相談なのだろう。人生経験といえるものが無い悠に、上手く応えることができるかはわからないが、それでも先輩という面子がある。

「それはどんなこと？」

「先輩の家、どこですか？」

「え？ あ、ああ、もうすぐ着くけど……」

無駄話をする暇もなく、彼の家が見えてくる。向かいの家、二階の部屋はいつものようにうす桃色のカーテンが閉められ「白熱灯の明かりが漏れていた。

ブレーキがきゅつと音を立てる。和子は荷台から下りると、視線を上に向けていた。

「いえ、少しここで相談をさせてください」

「ここで？ 寒いし、人に聞かれるよ？」

「お願いします……」

いつものお茶らけた様子が一切無い和子は、江成家の二階の窓を見つめつつ、そう呟いた。

「わかった。付き合っよ」

「すみません……」

相談の内容も気になるし、彼女の視線がどうしてもあの部屋を見ているのか気になる。

「ねえ、相談って……」

「はい……、私、この前弘樹君に告白されたじゃないですか……」

「ああ、アレは驚いた。普通あのタイミングで言うかな？ なはは」

「ちょっとぴり酷いと思います。だって、いくらなんでも先輩の前でそんなこと……」

「まあ、もう少しムードとかあったほうがいいよな。で、それが相談？」

あのあと二人がどうい話をしたのかは知らないが、最近の二人

を見ていれば、順調であることはすぐにわかる。

「いえ、違います。あの、家庭教師のことなんですけど、今、いるんですか？」

向かいの家の二階の窓は桃色のカーテンが閉められている。そして漏れる白熱灯の明かり。

「ああ、多分」

「その人って大城の人なんですよね？」

「ああ」

「若い？ 眼鏡をかけてていつもスーツ？」

「うん。そうだけど、なんで知ってるの？」

「先輩に聞くのは酷なことだと思います。でも、知りたいんです。

先輩の彼女、今あそこで家庭教師の人とエッチなことしてるじゃないですか？」

「え！？」

突然のことに、言葉が出ない。一体なにを言い出すのかと。

「な、そんなこと……、っていうか、勉強中じゃないの？」

「保健の勉強かもしれませんね……」

「おい、和子ちゃん、いったい何が言いたごんない？」

穏やかに言うも、彼女がどうしてそんな下卑た冗談を言うのかわからず、自然と語尾があらぶる。だが、和子はそれを意に返すこともなく、やはりあの窓を見ている。

「もし、先輩が片思いのその人と付き合えたら、平気ですか？」

「なにが？」

「処女じゃなくても……」

「……ぐう！？」

言葉が直接的過ぎる。童貞である悠にはリアリティの無い言葉に想像も理解も追いつかない。

「今、電気小さくしてますけど、エッチしてますよ。多分」

「なんだよ、そんなこと見ないとわからないだろ！？ いったい何

が言いたいんだ？ 何をしたいんだ？ 俺を怒らせて楽しいか？」

「今何時ですか？」

「？ 七時……五十八分かな……」

「いつ終わるんですか？ 家庭教師……」

「そんなこと、俺が知るわけ……」

八時には終わるはず。毎日みていたからわかる。

「八時ですよ。いつも先輩、帰るの八時近くだし……」

いつの間にか監視されていたようで、彼がどうして練習に励んでいたのかも、和子にはお見通しらしい。

「隠れましょ……」

「なんで？」

「見たいですか？ セックスした後の二人……」

「いや、だから……」

反論しようとしたところで電気が消えた。

時計は八時一五分。前に行くわしそうになって、慌てて遠回りをした時間帯。

和子は断りなしに悠の家の門をくぐると、江成家が見える場所ではやがみこむ。

言いたいこともあるものの、悠もそれに倣い、彼女の隣にしゃがむ。

「和子ちゃん、後でしっかり聞かせてもらっけど、いいよな？」

「いいですけど、私の勘違いならごめんなさい。でも、多分……」

扉が開き、美琴とあの男が出てくる。恵子の姿も見えたが、美琴が送っていくところを見届けたあと、すぐに家の奥に消える。

門を出たところで、二人は言葉を交わす。それはとても小さく、聞こえない。

暗がりでもわかる。彼女は今笑っている。

今、恋をしている、場合によっては愛している男を前にすれば、当然のこと。

そして……。

「説明しなくてもわかりますよね」

二人の距離が近づくと、そのまま特殊な引力に引かれて唇が重なる。

「!？」

悠の胸がぐつと苦しくなる。見開いた目に映るのは、暗がりで見合い、キスをする幼馴染と家庭教師。それは立場や年齢に若干の隔たりがあるものの、第三者が干渉すべきことでもない。もちろん、心情は別にして……。

「やっぱり……」

ぼそびと呟く和子の言葉に、悠は横目で睨む。

数秒。濃密な時間。生ぬるく、鬱陶しい時間。胸の辺りが苦しく、胃の中のを吐き出したくなる。

「それじゃ……」

「うん。また今度……」

ようやくキスを終えた二人は離れ、別れを惜しむように互いに手を振っていた。

「ふう……」

ため息をつく美琴は、とぼとぼと玄関に向かう。

その時、静かな空間を乱す振動音がした。

美琴は自分のかと思ひ、ポケットを探る。しかし、そうではない。音はもつと背後からしていた。

悠は焦っていた。それは隣も同じらしく、慌てて携帯を取り出すと、電源ボタンを長押しする。

「誰？ 誰がいるん？」

美琴がやってきて、門に手をかけると、二人と目が合う。

「悠？ 何してん？ そんなところで……」

「いや、別に、ただ、その、ああ、後輩が電話を落したっていうから、ちよつとな？」 「え？ あ、はい……、なんか落ちちゃって、それで今鳴らしてもらったから見つかって……」

「そんなところに携帯落すん？ 変なお」

訝しげに呟く彼女。表情は見えないが、おそらくは先ほどのことを覗き見されていたと気付いているらしく、言葉尻がとげとげしい。「いや、だから、別に和子ちゃんちょっと相談受けて、だから…」

「悠、正直にいいなさいな。見てたんでしょ？」

「何を？」

「だから、先生とウチがそういうことしてたん……」

「いや、まあ、そうだけど……」

「どうして？」

「いや、だから……」

「最近、メールもくれんし、なのに、こんなんして……、最低やわ……」

落胆した様子の彼女。おそらく秘め事にしたい行為を見られたゆえの苛立ちだろう。

「違うんです。その、私がいけないんです！先輩にワガママ言って、送ってもらって、それで、携帯落して……」

「ふ〜ん、送ってもらってん……。なら、そういう関係なん？」

「そういつって……」

「ええやない。悠だってそういう年頃だし、むしろ、気になってたわ。誰かいい人いないのって」

「お前、なんか誤解して……」

「えと、貴女のこと知らないけど、でも悠をよろしくね……」

美琴は彼の弁明など待たず、和子に歩み寄ると丁寧にお辞儀をする。

「え？ あ、はい……」

あっけに取られた和子は、何もわからずに頷いてしまう。

「はい、そちらこそ、菅原さんとお幸せに……」

「ありがとう」

にっこり笑う美琴は去り際、悠の耳元で「可愛い彼女、大切にしないかんよ？」と告げると、そのまま早足で家に戻る。

彼女の残した言葉の意味。そして、甘い体臭に混ざる不快な臭い。口の中が異常なまでに乾き、鼓動がやけに高くなった。

「先輩……、すみませんでした……」

「いや、別に和子ちゃんか謝ることじゃないよ。それに、これはしようがないことだよ……」

「でも、また今度、相談しましょう」

「相談？ なんの？ そんなの弘樹にでもしろよ」

「いえ、先輩じゃないとだめです」

「はあ？ 今見たろ？ 俺は、お前を彼女と誤解されていい迷惑なんだよ。いい加減にしる。惨めな男の感想でも聞きたいか？ 好きな女が別の男とキスして、それを覗き見して、最低って言われて！ お前、からかってるのか？」

「先輩、やっぱり好きじゃないですか」

「ああ、そうさ。だから辛いんだ。わかるか？ お前みたいに両想いの奴には関係ないもんさ」

「そうですね、関係ありません」

「は、なら、もういいだろ……。俺だってプライドぐらいあるんだ。泣いてるところ、見られたくないし、もう帰ってくれよ……」

「今は……」

「ああ、今はもう誰とも会いたくない。だから……」

「今はもう関係ないです。けど、前は違いました」

「は？」

「相談しましょう。ここだとあの人に聞こえちゃうかもしれませんし、先輩の家族が出てきても困ります」

「だから……」

言いかけて気付く。

和子の言う菅原は、初めて聞く名前だと……。

夜更けの公園。明かりの元に集まるのは蛾だけに非ず。ベンチに座る男子は頭を抑え、それを見下ろす女子は腕を組んでいた。

その話の内容とは……。

中学生の頃の和子は登校拒否をしていた。きっかけは二年生のときのイジメが原因。

靴を隠される、運動着を汚される、水泳の授業では下着を隠されるなど―嫌がらせは様々で、三年になるころ、唯一の友達であった子が別々のクラスになったのをきっかけに、不登校に陥った。

公立の学校のせいか、あまり教師も熱心ではなく、来ないなら来ないほうが面倒ごともないと、見放されていたらしい。

彼女は毎日、部屋で大好きな漫画を読んで過ごしていた。

もともと真面目な彼女は、このままではいけないと高校受験の準備を始めていた。

とにかく勉強に励んだ。桜蘭高校の狭き門をくぐるために。

桜蘭高校を志望した理由は一つ。難関高ならば、中学の頃の子とは別れることができる。それなら、一度イジメにあったことをリセットして、新たな学生生活ができると信じて。

参考書を見て何度でも立ち向かう。わからないことがあっても誰に頼ることができず、何度も涙しつつ、彼女は勉強に励んでいた。まるでそれしか道を知らないように。

夏を迎える頃には両親も一定の理解を示し、彼女に学校はいいから塾へいくようにと薦めた。

しかし、塾には自分を排除してきた子がいる。そのせい、踏み切れなかった。

それなら家庭教師はどう？

母の一言で決まった家庭教師。週三回の個別授業。

大城大学に通う二年生、菅原牧夫は中学の教師を目指しており、指導に熱心であった。

わからないことを懇切丁寧に、噛み砕いて、冗談も交えて教えて

くれる。

時折話す大学での話し。自分の知らない明るく華やかな世界。中学生生活に絶望していた彼女が憧れるのは、無理もなかった。

「和子ちゃん、好きな子はいたの？」

「いえ、男の子とかもイジメてきたから……」

少し前まではイジメられていたことを話すのが怖く、悔しく、辛かった。

けれど、夏の終わりのうちとけた頃には、もうそれもない。

牧夫にならなんで話せる。

そう、すっかり信頼を寄せていた。

「そっか」

「先生は？」

「俺は、最近フラレタ」

「へえ、どうしてです？ 先生カツコイイのに」

「ありがとう。でもさ、なんか浮気されて……」

「浮気？ 信じられない。先生みたいないい人がいて浮気するなんて……私なら絶対！」

冗談ではなく、本気だった。もちろん、自分のような暗く、小さく、垢抜けない中学生など相手にしてくれないとはわかってているが。

「ありがとう、和子ちゃん……」

優しすぎて窮屈。

それが別れの原因らしい。

身勝手な女の言葉に激怒する和子と、うなだれる牧夫。

自分を立ち直らせてくれた牧夫が悲しむ姿に、いつしか涙が溢れ

ていた。

気がつくのと、和子は彼を抱きしめていた。頭をなでたとき、彼も彼女のほうへとよってきた。

昼の頃。父は会社で母はパート。

二人きりの空間は暑く、熱く、お互いの気持が香り、そして…。

「和子ちゃん！」

牧夫は男と女についても教えてくれた。

初めてを捧げることに悔いなどない。むしろ自分のような半端者を一人の女としてみてくれていたことが嬉しかった。

週三回のうち、母がいない日は愛を紡ぐ日。

カーテンを引き、締め切った部屋で肌を重ねる二人。

玉のような汗を競って舐めあい、受け入れ、快楽を教えられた。愛し合ったある日のことだった。

シャワーを浴びにいった牧夫の、脱ぎ散らかしたズボンが低く振動する。

携帯がなっているのなら知らせてあげようと、和子はズボンを取った。

ポケットから取り出したとき、スライド式のせいでメールの件名が見えた。

『きょうこりんめえる』

顔文字の続くメールは男からのものとは思えない。和子は言い知れぬ不安に駆られ、恐る恐るそれを開く。

今日バイト終わったらあそびいこー。
生理終わったし、たっぷりできるよー！

生理？ たっぷりできる？ なにを……。

思い当たることなど一つしかない。下腹部の違和感が重くなる。
こぼつと音を立てて流れる牧夫の精子を、和子は慌ててティッシュで拭く。

下ではまだシャワーを浴びているらしく、水の音が聞こえる。
胸にぐつとこみ上げる酸味。必死に飲み込みながら、混乱を抑えることができない。

彼女はメールを自分のパソコンに転送すると、削除してからズボンの中にしまった。

その日は気持ちが悪いいい、帰ってもらった。

あま男は自分を騙している。いや、そんな大層なものではない。
単なる性処理の道具。ダッチワイフでしかないのだろう。

和子は何度もシャープペンの芯を折り、果てはHBを三本折って、ノートを三ページ破り捨てた。

そして、薬局に行った。

再び母のいない日中に、彼が来た。

和子は神妙な顔つきをしながら、セックスをするのかを聞く。
牧夫は自分が嫌いになったのかと聞くので、そうじゃないと否定した。

その後も何か言葉を交わしたが、覚えていない。

とにかく、相手に自分が何かいつもと違う様子だと悟らせた。

そして、薬局で買ったあるものを机の上に見えるように置いて部屋を出た。

露出した紙の部分はマーカールの赤で薄く滲ませておいた。

シャワーを浴びるフリをして、隣の父の書斎に隠れ、壁に耳を着ける。

しばらく何かを物色する音がした後、ようやく例のもの気付いたらしい。

「ちっ……、まじかよ……」

つまらなそうに舌打ちをして、嫌悪の感情の驚きの声。

普段の明るく、優しさに溢れたものではなく、遊び方を失敗したという、そんな言い方だった。

和子はその場にへなへなとへたり込み、しばらく立てなかった。

異様なことと思いつつ、彼に身体を預けた。

上っ面の愛してるの言葉と珍しくゴムを使つてのセックスでも、男を知る彼女の身体は反応した。そして二回いかされた後、シャワーを浴びてきてと頼んだ。

自分でも驚くほど冷静にことを始めた。

彼のズボンから携帯を取り出し、メール設定をする。

転送設定。メールが和子が新しく取得したフリーメールに来るようにした。

既に牧夫の正体もわかっているというのに、どうしてそんなことをするのか？ これから知るであろう真実は、彼女にとって残酷であるとわかりきっている。

それでも確めずにはいられなかった。

そして、できればその女こそ遊ばれている女であり、自分が本命であると、薄い希望を持っていたから……。

カテキヨの子が孕んだっぽい。マジでやべーよ。

自業自得だろ。またカンパとか無しな。

そんなこというなよ。この前の子食わしてやったろ？

あの子はよかったけど、お前がやりすぎてがばがばじゃん。

今回の子、ブスだし、やだな。

でも、やわらかいし、中学生だ。それだけで価値があるって。

あと半年で産廃になる子なんていりません。

くれるなら、俺がもらうぞ。一度食べてみたいし。

よし、売った。十万人。

三万。これ以上は出しません。

はいはい。わかったよ。たく、大損害だ。

自分以外にも被害者がいるのかもしれない。けれど、それはどうでもよい。

そして、自分は自分の知らない場所で貞操を売り買いされているらしい。

おそらくその三万は、墮胎の費用なのだろう。

和子は陰性結果の出た検査紙を机の上に置き、その後、家庭教師を辞めてもらった。

訳は話さず、ただ、疲れたからと。

沈んだままの気持ちで受けた受験は大失敗。その後、滑り止めに受けた山陽高校では自分を知る元クラスメート達がいたが、陰惨な気持ちの前に彼女らのひそひそ話など、小鳥のさえずりに過ぎなかった。

彼女の話とメールの内容によると、複数の生徒に手を出し、その後、知り合いに売春をさせていた。

手口は悪質かつ、単純。

セックスの後に理由をつけて撮影し、その写真で脅迫、他の男に紹介する。

狙われるのは大人しい子、世間体を気にする子、またはそういう親御を持つ子と推測される。

和子は彼らが行動を起こす前に気付けたおかげで事なきを得たのだろう。もし、気付かずにいれば、彼女もまた別の男に売春を強要されたのかもしれない。

「まずは、美琴さんを守らなければなりません」

放課後、二人だけの剣道部部室で、和子と悠は作戦会議を開いていた。

「ああ。でも、どうやって?」

「そうですね。それとなく注意ができればいいんですが」

「やっぱり直接美琴に言うべきじゃないか? 和子ちゃんのメールもあれば、多分……」

「無理ですよ。多分美琴さん、牧夫のことを信頼しづいると思いませんし、いきなり私達がメールを見せたところで、信用なんかしてくれません」

「でも、メールなら証拠に……」

「メールなんていくらでも偽装できるんですよ。既に牧夫だってアドレスを変えてますし、携帯も機種変更済みだと思います。それに、差出人を確認するなんて、警察沙汰じゃないと無理です」

「そう」

これが探偵物の映画やドラマなら、携帯の履歴を都合の良い「スーパーハッカー様」に簡単に調べてもらえるのにと、がっかりしてしまつ。

「今日から先輩がすることは、まず一つ。部活を早く上がって、美琴さんに声を掛けることです」

「え? そんなことして意味あるのかい?」

「お向かいには先輩がいます。そして、今さっきお互い話をしました。そんな状況でセックスをする気になれると思いますか？」

「セックスって……、童貞の俺に聞くなよ……」

「この見習魔法使いが……。けど、少なからず好意を抱いている先輩が脳裏にちらつけば、罪悪感が生まれます」

「背徳感で逆に燃えるとか？」

「かもしれません。でも、覗き見されてるかも、とか、勘付かれるかもと思いつながらするような人には思えません」

「ああ」

「いいですか？ 今日からは部活熱心なふりを悉めて、定時に帰り、美琴先輩を待ち伏せして一言一言会話して、カーテンのこととかそついつのを牽制するんです。とにかく二人を暗い密室に一緒にさせないことです」

「そんなに上手くいくかな……」

「これは予防策です」

「それに、もしそういうことしなかったとして、どうなるんだ？」

「美琴はアイツを好きなんだし」

「牧夫が美琴さんを好きではないからこそ有効なんです。アイツは性欲の塊だから、もしセックスができないなら、強引な手に出たりしますよ」

先ほどからセックスを連呼する和子に気持ちを落す悠。彼女の言うことは、真実を含む。既に美琴は女になっており、その相手も……。

それでも目を背けたい真実がある。「見ない」と選択できるはずなのに、それでも、もし美琴が不幸になるかもしれないというのなら、自分はそれを……。

「来週の開校記念日、暇ですか？」

「え？ ああ……」

「それじゃあ行きましょう」

「どこに？」

「大城大学です」

「なんで？」

「今は少しでも情報を手にする必要があります。私達はあがかないといけないんです」

「なるほど……」

終始後輩に言われるがままの悠は和子に感心しながら、何も具体策を出せない自分を情けないと感じていた。はがゆいとはこういう気持ちなのだろうか？ そんな自嘲気味で……。

「じゃあ、記念日は相模大野の前で九時に待ち合わせです。今日とはにかく先輩はまっすぐ帰るんですよ？」

まるで教育ママのように言い切る和子に圧されつつ、これも美琴を守るためと頷く。

作戦会議も一旦休憩、他の部員は既に道場で練習を始めているだろう。悠は先に部室を出る。

「先輩、遅かったですけど、どうかしたんですか？」

心配そうに言うけれど、その表情は険しい。睨む視線には明らかに敵意があり、それ以上に部室の中を気にしているようで、そわそわと視線を向かわせる。

「いや、別に……。んじゃ、お前も練習遅れるなよ」

悠はすれ違いざま、彼の肩をぽんと叩いて部室を後にする。

背後では何か言いたげな弘樹が戸惑っていたが、何かを振り切るように彼の後に続いた。

反撃

五時を回る頃、悠は帰り支度をしていた。

最近の自主練習も厭きたのかと、部長は特に何も言わないが、鍵を返しに行くのが面倒とこぼしなら職員室へと行く。

今から急げば美琴の帰宅時間に間に合う。メールや電話ではなく、直接面と向かって会話したほうがいいだろう。

そう考えた彼は、駐輪場から自転車にまたがると、颯爽と校門を後にした。

吹っ切れたといえは嘘になる。

二人がキスするところを見たのだし。

まともに話すことができるのだろうか？

少し前までなら平気だった……だろうか？

いや、違う。

メールでのやり取りが増えたのに、電話はできなかった。

彼女を避けていた。

顔を合わせない、現実を薄くさせたメールでの繋がりにかまけて……。

美琴……！

つま先でペダルを踏む。身体を強張らせて姿勢は低く、風の抵抗を受けないように。

まるで競輪選手のようなスタイルは、通学用の自転車には似つかわしくない。

それでも彼は漕ぎ続け、六時を回る頃には家が見えてきた。

向かいの家の二階の窓を見る。

暗がりでもカーテンは敷かれていない。

間に合った。

ほっと一安心する悠は自転車を漕ぐのをゆっくりにする。途端に汗が噴出し、シャツがぺたぺたと張り付き始める。それは秋風に煽られ、寒気を残して消えていく。

「まだ……だよな……」

そう思った矢先、通りの向こうに見知った人影があった。

濃紺のブレザーと膝上五センチのスカート。ポニーテールをふわふわ揺らすのは、細めの女の子。

美琴！

駆け出したい気持ちが沸き起こる。

先ほどまでは会って何を話せばよいか、自分のへたれ具合をどう見つめるか悩んでいたのに、こうして彼女を見ると、それもわからなくなる。

「あれえ？ 悠じゃん。どしたん？ 今日は早いね〜」

彼女も彼に気付いたらしく、ぱたぱたと走ってくる。

それが、単純に嬉しかった。

「ああ、試合も無いし、俺も来年は受験だからさ、早く帰るようにしようかって思って……」

「ふうん、そうなん。よかったわあ……」

「え？ なんで？」

「だって、悠が就職とか似合わんし、それに、ウチだけ大学生で遊ぶなんてできんし……」

「俺だって地元に残るかわからないぞ？ ほら、剣道強いところ行きたいし」

「そっか、悠は剣道続けるん」

「ああ、俺にはそれぐらいしかとりえないし」

「そんななんいって……。悠にはええとこたくさんあるよ」

にこやかに笑う彼女。子供の頃から見てきた二人だからこそ、信頼のある言葉。

何も変わってない。そう感じられる。

「なあ、最近……」

「そういえば、悠……」

「あ」

「えと」

お互い言いかけてやめる。

「どうぞ」

「そっちこそ」

昔なら悠が美琴に譲っていた会話。

けらけら笑いながら話す美琴に、いつも肝心の話したいことを忘れてしまっていた。

「じゃあ、俺からな。最近、なんかカーテン閉めてるけど、どうして？」

だが、今は譲れない。譲らないためにも譲れないのだ。

「どうしてって……、それは、その……」

いいにくそうにうつむく彼女。もし和子の予想通りなら、それは……。

「俺も勉強がんばる。美琴も一緒にがんばってるなら、それが励みになる」

おかしいな理屈と思いつつ、そう告げる。

「そう？」

「ああ……。っていうか、誰かが監視してないと、すぐに嫌になるんだよな……。ほら、少し前はさ、美琴がいたから、勉強とかしっかりしないと怒られるって思ってた」

「そんなん……。それいうなら悠やって、ブラインド閉めてるじゃん……」

「ああ、そういえば……」

「ならウチも閉める」

「じゃあ、俺がブラインド開けたら？」

「あけたら……。あけたらどうしよ……」

「別に俺はやましいことしてるわけじゃないし、美琴がいやじゃないなら、ブラインドどころか窓だって開けとく」

「いや、窓は閉めてな？」

「はい」

「ん〜、そつかく、そうなんなあ〜」

「いや、別に無理になんていわないよ。美琴が勉強に集中したいからそつしてるんだろうし、変なこと言っただけ悪い」

「作戦は失敗かと思いかけたとき、美琴はうんと頷いて彼の鼻をちよんとつつく。」

「いや、いいんよ。ウチが悠のこと監視してあげる。だから、来年は一発合格するんよ？ 一緒に大学生になるためにね」

「ああ、がんばろう……」 納得がいった様子で頷く彼女。騙しているところもある悠は、むしろ彼女の目が見られないが、そこらへんは暗がりフォローしてくれる。

「それじゃね」

「うん。そいじゃ……」

思わぬ約束を取り付けた悠だが、少し思い出して振り返る。

「なあ、美琴は何を話したかったんだ？」

「ん〜ウチ？ えっと、悠も最近彼女さんと上手くやってんのかな〜って！」

声を大にして言う彼女に面喰らうが、言い切るだけで言い切ると、彼女はそそくさと玄関に消える。

それは誤解なのだといいたいが、余計なことを言えば和子にも迷惑がかかると、彼も家に入った。

ブラインド全開にして机の前に座る。

向かいの窓では既に美琴がスタンバイしており、にこやかに手を振ってくる。

窓を開ければ会話もできる距離だろうけれど、四方数メートル範囲に筒抜けの会話もしゃれにならない。

手持ち無沙汰でいるのも無意味と、悠は勉強道具を取り出す。まるっきりの剣道バカというわけでもない彼は、明日の予習でもすべきと、数学の教科書を開く。

向こうも始めたらしく、ちらりと視線を送ると、参考書片手に首を捻っていた。

しばらくして、美琴が動く。彼女が部屋を出たのを確認してから悠も道路のほうを見る。

菅原牧夫がいた。

今日は比較的カジュアルな恰好で、これから勉強という雰囲気ではなかった。

牧夫は彼女の部屋に上がったと同時に窓際に立った。きっとカーテンを閉めるつもりなのだろう。

しかし、それを美琴が制し、何かやり取りをしているのが見えた。それもやがて収まり、授業が始まっていた。

彼は彼女より少し離れた場所に立ち、英語かなにかの教科書を手にしていた。

悠はその様子を見たあと、笑いがこらえられなくなり、手近にあった漫画を開いてカモフラージュする。

その後も牧夫は美琴の周りをうろろろするだけで、特別な行動は一切しなかった。

帰り際も美琴は玄関先での見送りのみで、路上での抱擁はお預け。とぼとぼと帰路につく牧夫に、悠はようやく一矢報いたと感じた。

開校記念日の朝、悠は霜模大野の駅の前にいた。

十時を回った頃のせいかな、駅に人はまばらで、遠くからかけてくる和子を探すのも苦労しなかった。

「お待たせしました、悠先輩……」

「一体どうしたの？ その恰好」

デニムにパーカー、ついでに大きめの眼鏡、目深に被った帽子と怪しさ全開の和子に、悠は面食らう。

「私は先輩と違って過去があります。だから、万が一を考えて、変装してるんです」

「なるほど……」

言われてみればそのとおりと、悠は頷く。

「それじゃ、行きましようか……」

「ああ」

並んで歩く二人だが、手を繋ぐわけではない。デートというには、あまりにも酷な過去が女の子の肩にかかっているのだから……。

大勢の人が行き交う大城大学正門を前に、悠はどきまぎしていた。出る人も入る人も身分証の提示を求められるわけでもなく、フリーパス。必要なのは運送業者ぐらいのもの。

堂々としていれば良い……、はずなのに、悠はどうにも身構えていた。

和子はというと、これまた堂々としており、自然と悠が彼女に付き従うという風になる。

「先輩、もっとしゃきつとしてくださいよ……」

「だってさ、なんか悪いようない……」

入り口にあった立て札には「関係者以外立ち入り禁止としっかり書かれている。」

オーブンキャンパスならともかく、平日において、はっきりいっ

て二人は部外者だ。

そもそも、キャンパスの中でたった一人を探し出すことなどできるのだろうか？ もし講義のスケジュール的に休みだとしたら？ 事前に何も調べていない悠は、その無計画さに舌打ちする。

しかし、和子はというと、目的があるらしく、ずんずんと進んでいく。

「和子ちゃん」

「なんです？」

「どこに行く気？」

「部室です」

さも当然という様子の和子は、徐々に早足になる。

「部室？」

「ええ、牧夫は映像研究サークルに入ってます」

「なんで……」

知っているのかと聞きそうになり、口をつぐむ。彼女はあの男のあれの形も知っているのだ、些細なことを知っていたところで、別段驚けるはずもない。

「でも、入れるかな？」

「誰かいると思います。入部希望を装えば、多分いけますよ……」

入部希望どころか入学さえしていない彼女。豪胆にもほどがあると思いつながら、悠は他に策が思いつかない。

そうこうしているうちに部室棟へとたどり着く。

二階建ての建物の一先端ここに位置する映像研究サークルの部室は、スモークのガラス越しにも部屋の散らかり具合が見え、人がいるのかわからない。

悠はひとまずドアに耳を当てて、中の様子を確認する。

人の気配はしないが、何かの動作音がぎつちち、ぎち、がちよと頻繁になっている。

「パソコンかしら？」

ポストを無理やり開いて中を見る。中受けは既に壊れているらし

く、散らかった部屋には二台のデスクトップとノートブックが一台、それらは青い光を出しながら、何かをしていた。

無人を確認した悠がドアノブを動かすと、それは抵抗なく開いた。「無用心だな……」

ここまでできたらもう遠慮することもないと、悠は部屋に勝綬に上がり込む。

手近にあったマウスをちょっと触ると、「画面がぱっと開き、何かの作業を伝えるバーがせわしなく動いている。

「なんだろ……」

普段パソコンを使わない悠には、触ってよいものなのかかわらないが、和子はお構い無しにマウスを動かし、いくつかのフォルダを開いては閉じるを繰り返す。

3 g pと書かれたフォルダを見つけたとき、彼女の手が止まった。

「どうかしたの？」

「いえ、なんでも……」

そのフォルダが開かれると、さらにファイルが見えた。

ファイル名は全て数字。最初は何のことかわからなかったが、どれも八桁の数字から始まり、先頭二桁は20。

「それってまさか……、なわけないか……」

ここは映像研究サークル。自主制作の映画と、その日付に過ぎないだろうと思に至る。

しかし、和子は無言のまま、ある一つを選択すると、かちかちとクリックする。

画面に小さく開くウィンドウ。赤、白、黄、青のバーが並んだと思ったら、急に暗転し、今度は青い画面が出る。

ファイルと思しき数字が出た後、どこかの部屋の様子が映し出された。

こぎれいなベッドと本棚、クッション、タンスに机。CDラックと散らばった漫画。部屋の様相はピンクが基調樅なっており、部屋の主が女の子であることを想像させる。

やがて扉が開き、誰かが入ってくる。白のニーソックスとブルーのプリーツスカートが見えた。

そしてもう一人。こちらは黒のスラックス。

視界は下向きで、顔が見えない。

女の子と男はしばらく談笑したあと、英語で話し出す。ただたどしいそれは、お決まりの定型句ばかりなので、教科書や参考書のものだとわかる。

おそらくは、家庭教師の風景だろう。つまり、この男は牧夫ということ。

ねっとりとした唾が悠の口内に溢れる。

もし彼の思うようとおりであれば、この動画は……。

和子はシークバーを小刻みに動かす。

その動画は、勉強の様子を隠し撮りしてただけで終わっていた。何も不自然なところは無い……のだろうか？ そもそもどうして盗撮をしているのか？ それが一番不自然なところ。

動画が最後まで再生されたところで、自動的に次の動画に移る。

ナンバリングのあと、暗転。そして、再び例の部屋。先ほどと何も変わらない。

そこまでは。

やってきた女の子は、今度は最初からベッドに座っていた。

脚をぶらつかせ、そのたびに太ももの奥を覗こうとしてしまう、悲しい悠。

けれど、その期待はすぐに応えられ、牧夫と思しき男が彼女をベッドに押し倒す。

「なっ！」

強姦の類ではないが、それに類するもの。少なくとも彼女はこの撮影のことを知らないであろうし、知っていたとして、それを大学のサークルのパソコンに入れることを許可するはずが無い。

和子はさらにシークバーを動かし、動画の内容を確認する。

ベッドに横たわる女の子はアイマスクをしており、男が撮影して

いることに気付いている様子もない。

さらにジャンプしたところでは、よつんばいになった少女が後ろから男に突かれ、身体を仰け反らせていたり……。

「おい、和子ちゃん……もう十分だろ……」

これがアダルトビデオの類なら、悠も気兼ねなくというわけにはいかないが、後ろめたさもない。けれど、にじみ出る悪質さ、異様さに、倫理観が拒否する。

「はい……、すみません……」

彼女はようやく動画を消す。

つきまとう影

「どうする？ これなら証拠になるだろうし……」

「できませんよ……。だって、このことが明るみになってしまえば、被害者は好奇の視線にさらされます。そういうセカンドレイプのほうに怖いです……」

ファイルは複数。当然被害者も多数。事件を明るみにするのは簡単だが、それがどの程度の価値があるのだろうか？

和子のように立ち直っている子もいれば、そうでない子もいる。

悠は浅はかな復讐心を抑えることにしたが、冷静になることができない。

それに、

「なあ、もしかして美琴のも……」

せめて彼女のデータだけでも削除したいと、和子をせかす。

安堵すべきことなのか、最新のファイルは七月までしかない。

時期的にはまだ撮影されていないように見えるが、ここ以外に保存場所がないとも言い切れず、予断を許さない。

「正直、ここまで酷いことをしていたとは思いませんでした……」

和子はファイルを調べながら、呟く。騙されていたとはいえ、一度は好意を持ち、抱かれた相手。信じたい気持ちがあるかといえ、ばそうでもないだろうけれど、限度を超えている。

「証拠だよな。とりあえず、なんかディスクとかに保存できる？」

「何年前の人間ですか……。今はこういう便利なものがあるんです……」

和子はガムのケースみたいなものを取り出すと、パソコンの脇にそれを差し込む。

「なにそれ？」

「USBメモリぐらい知っていて損はありません。それより……。なんかつごく遅い……」

「え？」

「大丈夫かな、誰か戻ってきたら……」

てきぱきと動作する彼女だが、その作業の工程を知らせるバーは、あと五分かかると示している。

「大丈夫だよ、五分ぐらい……」

部屋に入ってから既に十数分たっている。その状況であと五分といわれると、たかが三百秒といえど、長く感じてしまう。

さらにいえば、不法侵入者でもある。

いくら彼らが犯罪をおかしているとはいえ、それはそれ、これはこれ。特に、牧夫達に見つかれば、ミイラ取りがミイラになりかねない。

りんごーん、かんごーん……。

部室にまで響く鐘の音。続いてざわめく声が聞こえだす隙

それは数分と待たずに部室棟にも訪れ、廊下を行きかう足音がする。

「急げる？」

「パソコンさんに言ってください……」

あと三十秒。

気持ち的にはもう十分なのに、未だに作業は継続中。

その間も足音は大きくなり、そのうちの一つが徐々にこちらに近づいてくる。

どうしよう……。

悠一人なら窓から飛び降りることで難なく逃げ切れる。しかし、和子も一緒なのだ。

その時、隣のドアが開いた音がする。この部屋に向かっていたらと思われた足音は、実は隣に向かっていたらしく、ドアに耳を当てても、人の気配はない。

「焦った……」

ふうとため息をつく悠を横目に、和子はUSBメモリを取り外す。「終わりました、行きましよう……」
彼女が何を終えたのかは詳しくはわからないが、何かあったときの切り札を手に入れた事实に、十分に収穫があったといえる。

急いで部室を出る悠と和子。

ドアを開けると、すがすがしいほどに寒い空気が彼らを出迎える。

ただ……、

「やば……」

帽子を目深に被りなおす和子。階段のほうからは、男子の一団がやってくる。

彼らの足取りは途中で曲がる様子もなく、徐々に距離が狭まっていくな。

くそ……！

微妙な状況だ。

今、悠たちがいる場所は二階の通路の一番端。部室こそ出ているものの、どうしてそのドアの前にいるのかは、不自然極まりない。

さらに言えば、彼ら映像研究サークルの所業からして、部外者を警戒するのは必然。

気付いた一行は足早に二人の傍へとやってくる。

悠たちは視線を下にして、階段に向かう。

そして、今まさにすれ違おうとしたところで道を塞がれる。

「なんででしょうか？ 通れないんですけど……」

太めの男は自然な態度で道を塞いでくる。

「あのさあ、さっき俺らの部室から出て行かなかった？」

妙に甲高い声に苛立ちながらも、ことを荒立てまいとする悠。

「いえ？ 知りませんよ？ 見間違いないですか？」

苦笑交じりに応えるも、相手はそれで納得しておらず、通せんぼされたまま。

これでは埒があかないと、悠は和子の手を取り、強引に脇を通ろうとする。

「てめえ、逃げんじゃねえ！」

太めの男は怒ったらしく、脇を通ろうとした二人にリアットを食らわせるように腕を振るう。

「きゃっ！」

その腕が和子にあたり、帽子が落ちる。

「てめえ！」

先ほどの動画のこともあり、一瞬でかっとなった悠は、太めの男のあるかないかわからない首に腕を押し付け、そのまま勢い任せに壁に押し当てる。

運動部の彼と運動不足の男では勝負は明らか。太めの男の仲間は加勢しようとするが、悠の鋭い視線で睨まれると、誰も前に出ようとしなない。

「お前、女の子に何しやがるんだ！」

「ぐ、くるしい……」

腕一本、力任せに押し付けられているだけのこと。体重で考えれば不利なのは悠。しかし、勢い、気迫任せの不意打ちに、太めの男はグロッキー寸前。

「謝れ！」

「先輩、もういいですから、早く行きましょう……」

「だめだ、謝れ！」

「ぐふう、ご、ごめんなさい……」

ようやくそれだけ言わせると、悠は太めの男を解放したあと、おまけとばかりに一発殴る。

「どけ……！」

数で負けるも気迫で勝る悠の一喝に、映像研究サークルの面々は道を譲る。

悠は和子の手を引くと、足早に階段を目指した。

逃げるように大学を後にした二人を迎えるようにやってきた急行電車に乗り込む。

ガラガラの車内なので、遠慮なく腰を下ろす二人。今は何も言いたくないのか、無言のまま、身体を揺らしていた。

話を聞いた段階では半信半疑でしかなかった悠だが、さきほどの生々しい映像を見て、自分が甘かったと理解した。

今はまだ美琴の画像は無いが、もし二人の関係が続けば、彼女もいずれ商品ラインナップに加わるのかもしれない。

見知らぬ誰かが彼女の痴態を見て、そして……。

そんなこと、納得できるかよ！

本当なら今すぐにも彼女に真相を伝えたい。証拠なら既にこちらの手の中にある。

悠では牧夫であると断定できないが、美琴ならおそらくは……。身体を重ねた二人なのだから、他人にわからないこともわかるだろう。

そう思うのは癪だが、彼女を説得できなかった最後の手段として考える。

他に……。ん!?

ズボンを掴む手があった。

それは和子のものだが、何故か震えているのが気になる。

視線を向けると、彼女は帽子を目深に被り、うつむいていた。

「……どうかしたの？」

「……すみません……。あの、向こうの扉……」

扉のほうを見ると、そこにはスーツ姿の男性がいる。整った髪とおしゃれなデザインの眼鏡。ふちがなく、小さめのそれはやばったい厚さがない。

しきりに携帯をチェックしている様子で、いらいらしているのもわかる。

「……牧夫？」

彼女に聞き取れる程度の声で言うと、こくりと頷いてくれた。

瞬間、悠もまた怒りで身体が熱くなる。しかし、ここでことを荒げては意味が無いと、つま先を強く踏みしめることで堪える。

代わりにスケジュールを思い出す。今日は確か美琴の家庭教師の日ではない。

今すぐに戻る必要は無いが、おそらくは別の誰かが、その毒牙にかかるはず……。

そう思うと居ても立ってもいられず、今すぐに彼を殴りたいという衝動が生まれる。

「先輩……」

それをとめたのは、和子の手。

彼女の手を強く握り返すことで、何とか冷静さを保つ。

和子、後輩の彼女のためにも、ここは我慢するべき。

悠はどっかりと背もたれに寄りかけると、彼女をそっと抱き寄せ
る。

次の駅で一度降りよう。そのほうがいい……。

駅に着くまでの数分間、悠は目を閉じて待った。

電車を降りたあと、さりげなく牧夫を見る。

彼は特に気付く様子もなく、電車に乗ったままだった。

諸悪の権化をこのまま見過ごすのは複雑だが、狼狽する和子を奴と同じ空間に置くことはできない。

悠は次の電車を待とうとベンチの近くへ行く。

警報のあと、ドアが閉まる音がした。

もう大丈夫だろう。

そう思っただけで振り返ると、なぜか牧夫の姿がある。彼は携帯を弄りながらだが、こちらを意識しているように感じられる。その証拠に、彼もまた改札に向かう様子がなく、たまたま彼らを見ている。

もしかしてばれてる？

そう感じた悠は、ひとまず和子を抱えて改札に向かう。

彼もまたそれに着いてくるが、それならまいてやればいい。 駅

構内ならともかく、外なら逃げ場は自由なのだから。

悠は改札を指して歩く。

それは牧夫も同じ。

気付かれてる。

確信した悠は徐々に足早になり、改札へ向かう。

「先輩、ここ……」

「いいから、今は……」

「はい……」

背後の足音。改札に向かうだけのそれとは別に、明らかにこちらに向かっている気配がある。

振り向きたい衝動を抑え、改札口を手前にして切符を探すフリをする。渋滞を作ったところでようやく抜けると、二人はそのまま駆け出す。

向かう先は決めていない。とにかく走る。

ここから家までは駅一分。普段の部活でもランニングはこなしている。

駅改札から、誰かが走ってこちらに向かってくるのが見えた。

その向こうには例のスーツ姿もある。

仲間？

先ほどからしきりに携帯を弄っていたのを思い出す。メールなりで二人の様相を伝え、れたのかもしれない。そして、たまたま電車で居合わせ、追って来た。

偶然にしてはできすぎだが、用心に越したことはない、めっちゃくちやに走り出す二人。

路地裏、表通り、とにかく走りつつ、家のほうへと向かうことも忘れない。

五分程度、走ったところで和子が悲鳴を上げる。

さすがの彼女も、もうばてたらしく、ひいひい言いながら、近くの塀に手を着く。

「もう、大丈夫……だと思っ……」

「ええ、多分……、ですけど……」

誰かがついてくるような足音はない。振り切ったのか考え過ぎか？ それはさておき、近くの自販機でジュースを買つと、ようやく一息つける。

遠くの空では、傾きかけた日が、赤と青の混ざり合う、複雑な空を演出していた……。

部活でのことだった。

弘樹と模擬試合をしていたとき、彼は何度いなくても立ち向かってきた。

それは練習という概念を超えた気迫によるものであり、最後の胸をなぎ払ったところで、打撃と疲労で、ようやく膝を着いてくれた。

「今日はここまでにしておけよ。弘樹。つか、何かあったのか？ 怖い顔して……」

面を取った彼は鬼気迫る表情で悠を睨んでおり、それはいなされた悔しさなどでは言い表せない。

「まだ、まだだ！」

「だめだめ。俺はこれから用事があるの。続きはまた明日な」

「先輩、逃げるんですか」

「なんとでも言ってくれ」

安い挑発に乗れるはずもない。今日は美琴の家庭教師の日なのだ。そうでなくても昨日の今日。きつと牧夫も部員から昨日のことを聞いているはずだから、何かしらアクションがあるかもしれない。

「ほらほら、いそがないと皆に悪いぞ」

道場の掃除、防具の片付けを終えた部員達は既に二人を待ってお

り、悠は防具をつけたまま合流する。

「ああ……、それじゃあ全員、黙想……」

部長の号令により、部員一同シンと静まりかえる。

二十秒、三十秒。

いくら目を瞑ったところで煩惱は消えない。

今日もまた美琴を牧夫の毒牙から守らねばならない彼は、気が気ではなかった。

約一分後、目を開けた彼は、さつさと防具をしまうと、飛び出すように道場を後にする。が、それを弘樹の手が阻んだ。

「なんだよ。さつきも言ったろ？ 今日は何事があるんだよ」

「先輩、昨日、和子と、俺の彼女とどこに行っただんです？」

「え？ 和子ちゃんと……？ あ、いや、あれはだな……」

「答えてください」

「答えてつて、そんなたいしたこと……」

「たいしたこと？ 他人の恋人とデートしてたくせに、よく言いますねー！」

その言葉に、道場に居た部員全員の視線が彼らに向く。

あまり色恋沙汰に縁のない部員達は、気の無いフリをしながらも、しっかりと聞き耳を立てており、先ほどまでしていたおしゃべりもちいさくなる。

「デートなんて、そんな大層なものじゃない。というか、誤解だつて、俺は別に和子ちゃんを好きなわけじゃないし」

「好きでもない子の肩を抱くんですか？」

「いや、だから、少し黙れよ。誤解だつて。それに、大声で言うことじゃないぞ」

妙に敵愾心を持っていた理由はこれかと思ひ当たる悠だが、弘樹の様子をみるに、聞く耳を持ってくれそうに無い。時計は無常にも時を刻んでいるのだ。

「今は言えない。だけど、いつかきつと和子ちゃんが教えてくれる

さ。だから、今は彼女を信じるよ。それしか……」
言いかけたところでボディに重い一撃がくる。

「何が信じるだ。バカも休み休み言えよ。先輩、俺は昨日見たんだ。二人が一緒に居たところを。電車で寄り添ってたところもな！ なんだよ。後輩の彼女を奪うなんて最低だ！」

お腹を押えて蹲る悠の脇を、弘樹はずかずかと去っていく。

「先輩！ 大丈夫ですか？」

よせばいいのに和子がやってくる。部員達の視線は「やっぱり」と無言の圧力をかけてくる。

「大丈夫。っていうか、誤解されるし、もういいよ」

「でも、弘樹君が……こんなこと……」

「いや、いいさ。それに、辛いのはアイツだっ一緒。痛い程度、なんともないさ……」

ようやく立ち上がる悠は、無事をアピールするが、重苦しい痛みで身体がえびぞりになっている。

「先輩、肩かします？」

「大丈夫。そんなことより、弘樹のこと……いや、今は少し一人にさせといたほうがいいのかな……」

どうすればいいのか？ 彼自身わか ず、ただ目の前のことを盲目的にこなすべきと、和子の手を断って、駐輪場へと向かった。

* *

時計が七時半を過ぎる頃、ようやく家につく。向かいの窓を見ると、すっかりカーテンは開いており、気付いた美琴が手を振ってくれたのが嬉しい。

早速二階に行き、美琴の部屋を見る。

彼女を遠巻きにうろつく牧夫は哀愁すら感じられる。

よし、何もない！

悠は彼女の無事を確認すると、言い訳程度に勉強を始めた……。

どうすれば美琴を牧夫から守れるか。

悠にとっては至上命題なわけだが、最近はその一手が打てずにいる。

唯一相談できるはずの和子も、弘樹との一件があつてからは相談しづらく、たまに二人が部室で答えの出ない言い合いをしているのを聞くと、心が痛くなる。

それに今の遅延措置がいつまでも有効だとは思えず、焦り始めていた。

その日の部活には、和子の姿が無かった。そして、弘樹の姿も。

先日のことが尾を引いているのだらうと予想する悠は、やや苦い気持ちになり、さらに好奇の視線を向けられている気がした。

部活を終え、帰宅しようとした悠だが、駐輪場に自転車が無い。

移動されたのかもと周囲を探すが「やはりない。

しょうがなく電車で帰ることにする悠は、いつもと違うほうへ歩き出す。

時計は既に六時半を過ぎた頃。家庭教師の時間にはどんなに急いでも間に合わない。だが、最近の美琴なら、きっとカーテンを……。

あれ？

ふと気付く。今日は家庭教師が休みの日だと。

急いで損した。

悠は急ぐのをやめて歩き出す。そして何の気なしに携帯を見ると、着信履歴に見覚えの無い番号があった。

悠は不思議に思い、その番号をプッシュしたところ、駅前のラブホテルに繋がった。

不安に駆られた悠は、駅裏へと急いだ。

駅近くのきらびやかなネオン街。

ラブホテルのひしめく界隈は、寄り添うカップルがこそそと歩いている。

和子ちゃん？

ホテルの注射場の出口近くでうなだれる和子がいた。悠は急いで彼女の元へと向かうと、どう声をかけて良いのか悩みつつ、ゆっくりと話しかける。

「和子ちゃん、どうしてここに？　もしかして電話は、和子ちゃんが……」

「先輩……、あたし……もうだめかもしれない……」

悠に気付いた和子は、彼に向かってふらふら歩みより、こてんと頭を胸に埋める。そしてしばらくの沈黙のあと、すすり泣く声を上げる。

「一体どうしたんだ？」

「動画。私の動画が……」

「動画？　和子ちゃんのが、どうかしたの……？」

例の動画に和子のものがあったとしておかしくは無い。そして、昨今のニュースを見るに、流出という言葉や、回収不能という言葉が脳裏を掠める。

「複製があつて、それを、ばら撒くつて……」

「なんだって！？　でも、まだ、その、ばら撒かれては……」

言葉遊びというか、時間の問題でしかないが、彼女の言い分からすれば、まだ最悪の事態ではない。問題は、彼らの行動がやはり牧夫にばれているであろうことだ。

「和子ちゃん、落ち着いて。何があつたのか、説明してくれ……」
割と冷静でいられるのは、彼に直接的な被害が無いからなのかも

しれない。

後輩と彼女

部活へ行く途中、弘樹と会った。彼は疑心暗鬼に捕らわれており、悠とのかを否定しても聞いてくれず、また、彼女としても恋人である彼に過去を話すことができなかった。

彼とは別れてそのまま道場に向かおうとしたとき、非通知の電話が入った。

恐る恐るでると、それは牧夫のものだった。

彼は大事な話があるからと、彼女を駅前のラブホテル街に呼び出した。

一人で行くことに不安はあったが、これ以上悠とのかを誤解されても困ると、単身で乗り込んだわけだ。

そして聞かされたこと。

彼女が先日、サークルに忍び込み、パソコンを弄ったこと。さらに、彼女のデータを削除していたことを知っているという。

部員から部室に変な二人組みが出入りしていたと知らされた牧夫は、聞いた特徴と出入りする可能性のある人間を照らし合わせていた。

そして、たまたま電車で乗り合わせていた二人が、その様子に合致すると気付く。

それとなく観察していて、直ぐに和子だと気付いたそうだ。さらに、悠のことについても。

いつから撮影に気付いていたかを聞かれたが、すでにアドバンテージは彼にある。

彼は彼女にこう言ったららしい。

和子ちゃんのエッチ動画を見て興奮してる奴がいるんだ。もしよかったら相手してくれないかな？ かなり金払いのいい奴でさ。多分和子ちゃんもお小遣いもらえるよ？

猛反発する彼女だが、複製を出まわされることとの交換条件を言

い出され、何も言い返せずホテルへと連れて行かれた。

男を前にして震える和子だが、幸か不幸か、生理が始まっただけだ。

童貞らしき男は生々しい赤と臭い怯えたらしく、商談は不成立となった。

だが、生理が終わったら連絡しろと念を押された。

怖くなった和子は、唯一相談できる悠にホテルから電話を入れたのだった。

「どうしよう……、このままじゃ……私、学校どころか、生きて……いられないよ……」

涙する彼女をどう慰めてよいのかわからない。

「大丈夫、俺が何とかする。だから、こんなところに居ないで、さ、家まで送るよ」

ひとまず家まで送るべきと考える悠は、彼女に荷台に蒸るように言う。

「だって、だって……」

ついに堪えられなくなった和子は、大声で泣き出し、周囲をこそこそ歩くカップル達の視線を引きつける。

「和子ちゃん、落ち着いて……」

必死にあやそうとするが、それがどれほど無力なことなのかは十分わかつている。

安易な行動の結果、さらにぬかるみに嵌った二人は、牧夫に踊らされているだけなのかもしれない。

「お前ら、何してたんだよ……」

さらに都合の悪いことに、聞き覚えのある声がした。

山陽高校の冬服と悠の自転車。そして、その声の主は……。

「弘樹……」

「先輩の自転車、そこで見つけました。なんでこんな場所にあるんでしょうね？」

今一番会いたくない人。会いたくない場所だというのに、彼はずんずんと歩み寄ると、悠の襟首を掴んで叫ぶ。

「お前、何が違うだ、信じろだ！　ここどこだと思ってるんだよ！　なんで和子が泣いてるんだ！　説明しろよ！」

「やめて、弘樹君。違うの。そうじゃないの！　お願い、私の話を聞いて！」

「何が違うだよ。和子、君もどうして何も教えてくれないんだ？　俺は、君に何か隠し事したかい？　なのに君は言えない、話せないばかりなのさ？　どうしてこんなところで二人で居たんだよ！」

話すたびにヒートアップする弘樹。襟首を掴む手に力が入り、ポタンがプツンと飛んでいく。

「なあ、答えてくれよ。和子は俺の彼女じゃないのか？　俺、和子ちゃんのこと好きだったし、付き合ってたって言ったとき、本当に嬉しかった。けど、どうして先輩と浮気してるのさ。先輩だって、好きな人がいるんだろ？　何後輩の彼女に手を出してるんだよ……」

やがてトーンダウンしていく弘樹。彼もこの状況、特に肝心なことから省かれていることに、混乱と悲しみを併せ持っている様子。

「俺、和子ちゃんのこと、好きで、ずっと、部活でも、がんばってきたのに、なのに、どうして……、俺はダメで……」

「ダメじゃないよ。弘樹君のことが一番好きだよ！」
「ならなんで！」

「だって！　弘樹君だからこそ言えないことがあるんだってば！」
「なんで恋人にはいえなくて、先輩なら言えるんだよ！　そういうの裏切りじゃないのか？　なあ、どうなんだよ！」

真相をしる悠にしてみれば心苦しいこと。いっそ、気の済むまで弘樹の相手をしてあげるのも手かもしれない。それで気が済むものなら。

「この、このやろっ……」

襟首を離れた弘樹は、力なく悠の胸を叩く。二発、三発と叩いた

ところでうなだれ、しばらく地べたに座り込む。

「弘樹君、聞いて……お願い……」

「いいよ、もう……。俺には話せないことばかりなんだろ？ 俺、本当に和子ちゃんのこと好きだし、だから、もういいよ。君をこれ以上悲しませたくないし、先輩がいるなら、それでいいよな」

「違うよ。どうして聞いてくれないの……」

「聞いてもなにも、君は話してくれないじゃないか。俺だからこそ話せないって……」

「弘樹、和子ちゃんを信じてやってくれないか……」

「何言ってるんですか……。俺から、和子ちゃんを奪っておいて……、でもいいですよ。先輩なら和子ちゃんの支えになってくれるんですよ？ だから俺は……」

ふらふらと立ち上がる弘樹は二人に背を向けると、おぼつかない足取りで去っていく。

追いかけようとする悠だが、しがみつく和子が足手まといになる。「うわああああああああん、ああああああああん！」

はばかりことなく周囲に響く、和子の絶叫とでも言うべき泣き声。悠もまた、途方にくれてしまった。

和子を送り届けた悠が家にたどり着いたのは午後九時を回ろうとした頃。

向かいの家を見上げると、カーテンが閉まっており、明かりも無い。

まさか！

今日は家庭教師の日ではないはず。自分のスケジュール確認ミスかと思いつつ、自転車を急がせる。

暗がりの中、ライトが門のところにいる誰かを浮かび上がらせる。相手も気付いたらしく、こちらに顔を向ける。

「美琴？ どうしたんだ？ こんな時間に外に……」

まさか待つていてくれたのだろうか？

淡い期待を抱きながら近づくと、彼女の表情はにこやかなのだが、細い目は垂れていない気がした。

「こんな遅くまで外に……」

バシン！

頬を張る音は冷たい空にすっと消える。だが、頬の痛みと熱さはジンワリと彼にしみこみ、存在感を増していく。

「最低だよ。悠……」

「なんで……なにが……」

「後輩の彼女さんに手を出して、泣かせて……」

「いや、それは……なんで美琴が……それを……」

一瞬にして混乱する。

あの場所に美琴が居た？ どうして……。誰と……。誰かと！？

「言い訳とかしないの？ 違つとか、そうじゃない。話を聞いて。

本当は。俺を信じるとか……。言うてよ。聞いてあげるから！」

「いや、だつて、違つよ。そうじゃないんだ。なあ、話を聞いてくれよ。本当はそうじゃないんだ。俺を信じてくれよ……」

言い終えたところで彼女が鼻で笑つのが聞こえた。

「ほんと定型句なんね。悠の言い訳。そりゃさ、ウチには関係ないよ。悠と彼女と彼女の彼氏さんのことなんてさ。でもね、悠がそんな人だつたなんて嫌やよ。悠は私の大切な幼馴染なのに、どうしてそんな酷いことするん？ 好きあつてる人の間に割り込んでさ、最悪だよ……」

「だから、それが誤解だよ。もともと俺と和子ちゃんはただの後輩先輩だつて……」

「ただの後輩先輩なのに、どうしてあんな場所にいたの？ あそこどこだかわかつてるよね？ ラブホテル街だよ？ 何するところ？」

「そんなこと……、ならお前だつてどうして居たんだよ……」

「なっ……、話逸らす気？ さいつてえ……」

一瞬怯んだあと、嫌悪感をむき出しにする美琴。彼女からそんな態度を取られたのは、しばらくはないと、悠も驚く。

「いや、だっておかしくないか？ なんてお前も居て、弘樹も居て、和子ちゃんまで……？」

ふと気付く。

和子を呼び出したのが牧夫は、美琴を呼び出すことも可能。弘樹はどうして？ 彼が悠の自転車をホテル周辺で見つけたことも、全ては……？

鍵をつけず、ステッカーには堂々と名前を記入している悠の自転車。家庭教師の帰りならいくらでも観察できるわけで、見つけるのも難しくないはず……。

必然かもしれない……。

暴かれた真実

「先輩、いいところに居ましたね……。これからちよつと行くところがあるんで、案内してください」

「まあいいけど……。って？　おい、行くところがあるんで案内ってなんだよ」

「いえ、先輩の家なので、案内をお願いしたいんです」
「へ？」

突然のお宅訪問に間抜けな声を上げる悠だが、弘樹はそれに構わずに彼の手を引く。

「おいおいおい、ちよつと待てよ、俺は部活……」

「部活と彼女、どっちが大事なんです？」

「どつちつて、お前……」

引かれる手を振り払い、弘樹を見る。彼は何か決心をしているらしく、力強い瞳で悠を見ていた。

「先輩は来てくれますか？」

「いや、いいけど、でも……」

向かう先が悠の家でも、目的地は美琴の家だろう。そして、相手は牧夫。

彼もまた、真実を知ってしまったのだろう。

「お願いします……」

「ああ、わかったよ」

彼がどうするつもりなまかはわからないが、ただうじうじ悩むだけの自分と比べればずっと潔い。それならば流れに乗じて全てを明らかにしてしまえばよい。

悠は自分を卑怯な奴と思いつつ、彼を利用することにした……。

家の前にはさらに和子の姿があった。

彼女は私服であり、二人に気付くと黙って頭を下げた。

「和子ちゃん、どうしてここに？ っというか、学校も休んで……」

「え？ 学校休んだ？ どういうこと？」

「すみません、今日は辛くて学校さぼったんです。でも、なんか気になって……」

「気になるって……」

弘樹が真実を知る方法は和子から聞く以外に無い。考察する必要もないほど単純明快なことでも、悠には理解ができなかった。

「先輩は知ってたんですよね、和子とあの野郎のこと……」

「ああ」

「どうして黙っていたんですか？」

「いや、いえるはずないだろ。プライベートとかそういうレベルじゃないし」

「でも、俺には……」

「ん〜、そういうのはしょうがないんじゃないのか？ ほら、好きなお前だからこそ、言えないっというか、知られたくないことってあるだろ？ それに、俺に話したのだから、美琴が狙われてるからであって……」

言いながら何かがひっかかる。和子と悠にとって牧夫は敵。その構図は至極当然なのだが、何か抜けているというか、忘れていることがあるような、そういう気持ち悪さがある。

「とにかく、俺は和子ちゃんにもっと信じてもらいたかった」

「弘樹君……」

「いや、俺も人のこと言えないよね。先輩とのこと疑ったし……」

「そういえば、どうしてお前昨日あそこに居たんだ？」

ようやく話がひと段落したところで、悠は昨日気になっていたことを口にする。

「学生、特に高校生がうるつくには、具合が悪い場所。なのに何故彼が居たのか。自分の想像が当たっているのか、気になっていた。」

「ええ、それなんですけど、あの牧夫って奴と俺も会ってるんですよ」

「え？ お前も家庭教師を？」

「いえ、違います。あの日、先輩と和子ちゃんが一緒に大学に行つた日のことです。俺、すごく気になってて、こっそりつけてたんです」

「へえ……」

「それで、電車の中のことも知ってたんです。でも、その理由も全部和子ちゃんに聞きました。牧夫と一緒にだったんですね」

「ああ……、まあ、そうだけど……」

とはいえ、後輩の彼女を抱き寄せた事実が変わらず、苦いものがある。

「それで、先輩達が走って逃げた後、追おざとしたんですけど、見失ってしまった、和子ちゃんの名前をぼそつと、本当にぼそつと言っただけなんですよ？ それを牧夫が聞いていたらしくって、あいつ、俺に二人のことを教えるよと言われて、それでほいほい着いていつてしまつて……」

嫉妬の助けもあつてか、弘樹はすっかり牧夫に騙されてしまったらしい。

「で、和子ちゃんは昔の教え子で、最近は変な男と一緒に大学に来ては僕に嫌がらせをしている。もし何かあつたら君にも教えるからつて、連絡先交換して……」

「なるほど、それで昨日はあんなところに呼び出されたわけか……」

「はい……。言われたとおりのところを探したら先輩の自転車があつて、さらに和子ちゃんの声もしたして、もうなにも信じられないつていうか、いやになつて、俺は……」

「いや、誰がどう見たつてアレは黒だよ。勘違いというよりは嵌められたんだよ。俺もお前もさ……だから、もう謝らなくていい」

「はい、先輩、すみません」

「いや、だから……」

「そうでしたね。でも、俺は……」
後輩の誤解はあっけなく解けたわけだが、本当のところはどうなのだろう。

例の証拠を手に彼に本当のことを教えたのかもしれない。だとしたら、彼女にとって苦渋の選択だったであろう。恋人にかつての男とのことを聞かせ、場合によっては隠していたいことをさらけ出したのだから……。

「決着をつけますよ。俺なりの方法で……」

「いや、だけど、暴力沙汰は……」

「その為の退部届けです。まあ、退学届けは勘弁してください。さすがに中退とかきついんで……」

「いや、でも、そんなこと……」

「大好きな女をここまでされたんです。俺は絶対に赦しません」

「……いや、まあ、そうだな……。ふふ、うらやましいよ。お前はそうやってしっかりと彼女を守ってやれるんだな……」

「どうですかね？ 本当は悔しいからそうしたいだけなのかもしれない」

正直なところ、判断がつかない。彼がやろうとしていることが公になれば、傷つくのは和子だけではないのかもしれないのだから。ただ、消極的な自衛策では、いつかまた牧夫は和子の前に立つだろう。それならばいっそのこと、全てを断ち切るのも……。

「……なんですか……」

「……ああ、それで……」

時計はもうすぐ六時を回る頃。まだ家庭教師には時間があるのだが、角から聞こえてくる声は、一番聞きたくない声。そして……、
「あつ……」

美琴と寄り添うように歩いてきた牧夫は、一瞬固まった。

三人が揃っていたことと特に険悪な様子がないことに、ある程度
のことは察せられる。

「どうも、牧夫さん……」

静かに言い放つ弘樹は、今にも殴りかかりそうな様子で彼を睨む。「おい、やっぱまずいって。すこし落ち着け……」

悠は思っていた以上に熱くなっている弘樹に、やはり止めようかわって入る。

「どうかしたのかい？ そんなところに集まって……」

「しらばっくれなくてもいいですよ。もう全部和子ちゃんから聞いてますし……」

悠がいらないかのように牧夫に歩み寄る弘樹。彼はやがて悠を突き放し、牧夫の襟元を掴む。

「な、何してるのよ貴方！ ちょっと、離しなさいよ……」

突然の暴力にも美琴は毅然と声を上げる。だが、弘樹はふんと笑うだけで、そのまま牧夫を壁に押し付ける。

「美琴さんだっけ？ あんたもコイツに騙されてるんだよ！ まあ口で言ってもしょうがないし、俺、バカだからこういう説明のほうがいいんだよ！」

振り上げたこぶしがどしっと鈍い音をたてる。そして牧夫の悲鳴が続く。

痛みにしゃがみこむ牧夫の背中を、弘樹は遠慮なしに踏みつける。「ちよつと、何をしてん？ 自分、何をしているかわかってる？

悠も見えてないで止めてよ。……ああ、警察呼ぶわよ！ 貴方、止めなさい！」

一人事態のわからない美琴はきわめて常識的な対応をするが、和子が思いつめた様子で彼女の手を取る。

「ちよつと、貴女までなんなの？ ねえ、なんで牧夫がこんなことされないといけないの!？」

「コイツは、こうされてしかるべき奴なんです……」

「なにそれ、意味わからない……。とにかく止めさせてよ、ねえ悠、お願いよ……」

頭を庇って蹲る牧夫の姿に半狂乱になる美琴。彼女は昨日のことも忘れて悠にすがりつく。彼もまた複雑な様子だが、黙って頷くと、

二人のほうへ歩み寄る。

「もう止める弘樹。これ以上やったら後が面倒だ。まだコイツにはしてもらうことがある」

「でも、先輩……、コイツは和子ちゃんを、それに美琴さんだつて！」

「ああ、それはそうだけど、俺達が私怨で暴力を振るうのは別次元の犯罪だ」

本当は彼も殴りたかった。蹴って蹴って、蹴りまくって、今日までためた憂さを晴らしたかった。

けれど、今日の前で砂塗れになった牧夫を前にすると、たとえこの男が極悪人であったとしても、それができなかった。

同情とは違うのだろうと思いつつ、悠は彼の首根っこを掴んで上向きにさせる。

「ねえ、悠……、お願い話して……。なんで、なんでこんなことするの……」

ようやく終わった暴力の嵐にほっとしたのか、美琴は震えながら悠に声を掛ける。

「和子ちゃん、どっつする？」

対峙

「はい、ここまで来たら、隠せるはずもありません。けど、それはこの男の口から聞きましよう。その方が美琴さんも納得できるでしょうし」

「なに……、なんなの？ いったい牧夫、貴方、何をしてたの？」

「ここで話すのもあれだし、移動するか？」

「だめよ、だつて牧夫の手当てもしたいい、私の部屋で……」

「それはできません。警察呼ばれかねないし、穩便に済ませるつもりもありませんから」

「こんなにしといて、まだ言うの？ あんたおかしいわよ！」

「コイツはそれ以上におかしい奴なんだ！」

話しにならないとばかりに牧夫を連れて行こうする美琴だが、それを制すように悠が牧夫の肩をしよう。

「悠まで……。もういい、警察呼ぶ」

再び携帯を取り出そうとする美琴を止めたのは、和子の声。

「美琴さんもこの男とセックスしましたか？ おへその右にほくろがありましたよね？ ベッドほ入る前、やたらと鞆を気にしていませんでしたか？ 電動バイブを常にオンにしていたりで、妙な機械音がしてましたよね……」

「……な、なにを、言い出すの？」

いつもなら細いままの彼女の目が、ぎよつと見開いていた。

「美琴さん。私、去年なんですけど、この人とセックスしました」

そして、そのときのことを動画におさえられ、脅迫されました」

その後、力の抜けた手から携帯がすべり、打ち所が悪かったのか、おかしな方向に曲がると、光が消えた。

ちようど彼女の瞳のように……。

のぼり電車はこの時間空いている。しかし、すれ違う電車はどうやってここまで収納したのかというほどの乗車率をみせる。

人目を避けるため、電車の最後尾に陣取った悠達は、しばらく黙っていた。

今彼らは、大城大学に向かっている。

真実を知りたい美琴と、全てを消去させたい和子の折衷案として、いまからあの部室に行くこととなった。

その際、下手に動かせないためにも牧夫の身柄と携帯電話はしっかりとキープし、ひっきりなしに掛かってくる電話に、先ほど電源を落させた。

「あまり気持ちの良い話ではありませんが、それでも聞きますか？」
和子の問いかけに、美琴は一瞬迷った後、頷く。

周囲に身内以外いないことを確認したあと、和子はゆっくりと口を開き、これまでの牧夫との関係を話し始める。

その告白には、美琴も思い当たる節があるらしく、「うちも」と何度か相槌を打っていた。

弘樹は悔しそうにしたあと、またも牧夫を殴ろうとこぶしを振るうが、悠によって止められる。

もちろん、正義感からではなく、今暴力沙汰を起こしても、牧夫に都合が良いだけだから。

ぼつぼつと明かりが見えるキャンパスからは、人もまばらに出入りする程度。部室棟も人影が少なく、陸上部と思しき人達が整理体操をしているのが見えた。

都合の良いことに映像研究サークルの部室には、明かりが消えていた。

牧夫は希望が費えたとばかりにうなだれ、部室の鍵を開ける。悠は牧夫の身柄を弘樹に任せ、部室に入る。

電源の落ちているパソコンが三台。ネット回線らしきものは依然ないが、無線LANによるものかもしれないと、和子は警戒している。

「で、どれをどうするの？」

機械音痴の美琴はマウス片手に首を捻る。和子はそれを気にせず、一番大きいものを起動させる。

「ヴィーンという起動音の後、ディスプレイが光を放つ。」

しばらく待つてパスワードを求めろログイン画面。弘樹がこぶしを握るのを見て観念したのか、牧夫が告げる。

トップ画面からあるフォルダを開く。この前来たときに大体は覚えていたらしく、すばやく例のファイルのある場所を見つける。

「弘樹君は見えないで……」

カーソルがあるファイルを選択したとき、和子はぼそりと呟く。

「わかったよ」

「じゃあ、俺も出る……」

弘樹と悠は牧夫を連れて外に出る。

ファイルのタイトルには20xx | xxx | kazukoとあったのが見えた。彼女は一番説得力のあるものを選んだのだろう。ドアから漏れる喘ぎ声は、間違いなく後輩のものだから……。

「先輩、俺はコイツを救せません」

「俺もだ。だけど、まだ抑える」

「……はい……」

自由恋愛の結果ならばまだしも、最初から性欲目的の行為。さらにはそれをネタにした脅迫。当事者の恋人ということも廃しても、赦せる行為ではない。

本来なら白日の下に晒してしまいたいのだが、それは数々の不幸

を明るみにすること。

未だ躊躇してしまう。

「……終わったよ……、もういいよ、入ってきて……」

再び部室に入ると、動画はストップされていた。

美琴は今も信じられないという様子だが、牧夫を見つめる瞳には、先ほどの哀れみなどは無い。

「牧夫、これはどういうことなの？ 納得の行く説明が欲しいわ……」

……

「違うんだ、聞いてくれ！ これは、その、脅されたんだ。部員に、他の奴らに脅されて、仕方なく作ったんだ。俺が悪いんじゃない」

「ウチの動画は？」

「ない。そうさ、美琴。俺はお前を愛しているんだ。本当さ。だから撮影だって断ったんだ。けど、そうしたら……」

勢い任せにでたらめを言う牧夫だが、焦る分だけ良くすべる舌がすぐに言葉を枯渇させ、続きが出てこない。

「そうしたら和子さんのことを脅迫する　うに言われたん？　ち

がうよね。誰もそんなこと信じないよね？　どうなの？　ねえ、教

えて……」

「いや、だから、それは、俺は、俺じゃない……、こんなの……違う。誰かが嵌めるために……、そうなんだよ！　この前こいつらが勝手に部室に入ってパソコン弄ってたんだ。だから、あの映像は、こいつらの……」

「牧夫のほくら、見えたよ。お臍の近くにあるよね」

「いや、それは汚れぐらい……」

「もし和子さんと悠の作ったものなら、どうして牧夫のほくらがそこにあるってわかるの？　裸見ないとわからないじゃない。和子さんとそういつことがないとわからないよね？　どうなの？　言い訳する？」

「……はは、ははは……あはは」

突然笑い出す牧夫はゆっくりと立ち上がる。何をされるかわから

ないと、弘樹はそれをしつかり抑える。まるで警察の捕り物のようで、牧夫は身じろぐも抜け出せない。

「なんだよ。勝ち誇った顔しやがって！ ああ、そうだよ。その男優は俺だよ。出てるのも和子さ。去年だから中学生か？ 貧弱な引きこもり女を相手に俺もよくやるよな？ 名演技だと思わないか？

なあ？ 和子だって散々よがってたし、動画みたならわかるだろ？ こいつはさ、たしか四、五回く　いッタんだぜ？ 俺のちんぽが気持ちいいとか叫びながら……。ああ、そうだ……。お前もそうだったな。初めてのときは泣き叫んでさ、そのくせ慣れてきたら自分から腰ふってやんの。悠？ お前だよな。俺達がエッチしてたときに電話してきたの。ウザイったらありやしねー。しようがねえから聞かせてやってたんだよ。俺らの愛の行為をな？ それでしこつたか？ 大好きな美琴ちゃんが他人とエッチなことしてるときの声聞きながらさ！」

自暴自棄というか、やけになった牧夫は、聞かれてもいないことをべらべらと語りだす。弘樹は怒りで顔を真っ赤にさせ、和子は堪えきれずに泣き出していった。

「いい加減だまれよ……」
牧夫を抑えていた悠は彼を突き飛ばし、普段なら竹刀を握る手を固め、振り下ろそうとする……。と、それより先に美琴が立ちはだかる。

「おい、美琴、そんな尻づのか？」

彼女は目を赤くしていたが、それでも堪え、悠を見ていた。

「違う。悠が、こんな奴殴る必要ないよ。だって、悠は、剣道部があるもん。がんばってウチと一緒に来年大学生になるのに、そんなことして問題起こさなくていいの。だから……」

「だけど、俺は……」

振り上げた手はとうに下ろしている。あれほど怒りがこみ上げていたはずなのに、今もあるのに、どうしてか頭は冴えていた。

おそらくは彼女が真相を知ったことと、誤解というべきものが解

かれたからかもしれない。

「でも、美琴は平気なのか？」

「平気なんかじゃない。けど、そんなことしても始まらない。今はデータとかそういうのを処分しないといけないし……だから、悠もそれを手伝って欲しいの……」

「わかった。本当に辛いのは俺じゃないしな……」

部室の隅で泣き出す和子とそれを慰めようとする弘樹。二人もまた辛い立場にあるのだ。

「じゃあまず、……！？」

拘束が緩んだときを狙ってか、牧夫がドアへ向かって走り出す。

「待ちやがれ！」

悠もそれを追うが、逃げるさなかにドアを閉められ、思い切りぶつかってしまう。それでも怯んでいる暇はないと、ドアを勢いよく開ける……と、何かにぶつかる。

「牧夫、どこだ！……あれ？」

結末

先ほどのショックで立て付けが悪くなったのか、ドアが半分までしか開かない。

「なんだよ、これ、壊れたのか……、なんだ？」

何かクッションのようなものが置かれているのか、開けようとすると押し返され、たまに「ぐえ、ぐえ」と聞こえてくる。

下を見ると黒のスラックス。見覚えのある靴は牧夫のものであり、通路のほうには人の気配。よく見ると女性達が通路を通せんぼしていた。

その一団は袴姿で手にホッケーのスティックのようなものを持っており、それを地べたにはいずる牧夫に構えている。おそらく長刀部であろうけれど、この狭い通路ではいくら牧夫が竹刀を握ったところで不利だろうと想像をする。

「あ、どうも……」

思わず頭を下げた悠はひとまずドアを閉め、ポストから外を覗き、牧夫がそこをどいたところでドアを開ける。

「あの……」

「悪いけど、途中から聞かせてもらいました……」

「はあ……」

「なんかうるさかったし、痴話げんかかなんかだと思ってたんだよ。最初。けど、なんか中学生をやったとか聞いて、それは洒落にならないってなって……、こうして張っていたわけですけど、こいつが元凶？」

「はい」

「やっぱりね。なんかこいつらの部室イカクさかったし……」

「でも、まさか本当にしてるなんて……」

女子一同は口々に何かを言い合っているが、あまり評判の良いサークルでもないらしい。

「えと、どうしよう。今職員の人呼んじやってるけど……」

「そうなんですか……、えと、とりあえず、部室にあるパソコンを……、でもできれば見てもらいたくないんですよ。その、被害者の子と一緒に来てるから……」

「ああ、なるほどね。わかったわ。でも、パソコンとか私達弱いのよね」

「そうなのよね。これでやつつけちゃえたらいんだけど……」

一人豪腕の女子がたくましい腕で長刀の先っぽを回す。

「いや、それだと……」

むしろこのまま破壊してしまえば動画を再生する方法が物理的に無くなる。

「いえ、このパソコンは証拠品です……、だから、まだ壊さないでください……」

表の騒ぎを聞いていたのか、和子が弘樹に寄り添われてやってた。

「えと……」

「はい、被害者です」

「そう……」

足元でぼろぼろになっている牧夫も傍目から見れば被害者かもしれないが、これは因果応報というもの。

「職員さんも、もう直ぐ来ると思うから、待ってて……」

「はい……」

牧夫の罪を暴くことはできたが、彼に相応しい罰を与えるには彼らには荷が重い。悠は大人しく職員達がくるのを待っていた……。

時間的に遅いことから日を改めてと提案されたが、和子がかんとして引かなかった。

もし牧夫を帰してしまったら仲間に連絡が行き、報復なり証拠隠

滅が図られる。

確実な証拠は確かに保護しているが、DVDなど別媒体に記録されているものがネットに流出したら、回収は不能。

事実を聞いてとんぼ返りをした大学の女性理事長は事実確認のために、関係者を一度会議室に集めた。

女性職員が改めて動画の内容を確認し、身体の特徴から牧夫であると確認されると、理事長は不祥事について頭を下げてくれた。

表計算ファイルに記録されている購入者はどれも部の身近な人間だけであり、特に学外への流出の痕跡は無い。

彼らとしてはネットで販売をするつもりだったらしいが、規制法と昨今の規制強化、さらに拙弔手打ちのサイトでは客を集めることができずにいたらしい。

また、動画アップロードに関しては発覚の可能性が高いことと、足が着きやすいことから控えていたらしい。

全ては準備不足と保身が被害の拡大を防いだ、まさに不幸中の幸だが、和子は牧夫の証言を信じようとせず、どこかにバックアップを隠していると疑っていた。とはいえ無いことの証明はできないため、一旦和子に退いてもらう。

大学側としては映像研究サークルの活動を無期限停止とし、現状部室にあるものは証拠を隠匿されかねないとして、全て没収を言い渡す。また、塑逆性を持たないことと、指導するにはあまりにも度が過ぎていることから、警察へも連絡することを確約し、四人の目の前で警察と大学の顧問弁護士に連絡を入れてくれた。

素早い対応に驚く悠だが、帰り際、長刀部の人から「今の理事長は今年就任したばかりで、去年までの運営を非難するための材料探しに躍りになっている」と教えてくれた。

悠は都合の良いだしに使われるのだろうと思いつつ、それでも事態が解決に向かうのならと、頷いた……。

悠と美琴家についたのは夜の十時を回った頃だった。

遅いこともあって車で家まで送ってもらった悠と美琴だが、彼女は何か言いたげな様子で、玄関に入ろうとしない。

それは悠も同じで、二人とも視線をそらしつつ、横目で盗み見していた。

「あ、ああ……」

「う、うん……」

先ほどからなんだか出ては消える声。何を言ってよいのかわからず、かといってこのまま分かれる気にもなれず、ただ無意味に時間が過ぎる。

「なあ、公園にでも行こうか？」

「なんで公園なの？ もっと気の利いたところとかぺいの？」

ようやくの提案に美琴は少しご立腹の様子。ただ、最後は笑って歩き出してくれたので、悠もそれを追う。

夜更けの公園には誰もいない。

全てはあのベンチで始まったことなのだろうか？

和子からあのことを聞かされたときは、ただ美琴を守らねばならないと意気込んでいただけだが、こうして考えると、自分はどこまでそれができたのか、自信が無い。

「……久しぶりかな？」

「何が？」

「こうして二人で会うの……」

「そうでもないよ」

「そうだったけ？」

「うん」

最後に二人で歩いたのはいつだろう。四月の頃には既に気まずい関係になっていたしで、もしかしたら一年を数えるかもしれない。

「ねえ、ブランコ乗ろうか？」

「いいよ、別に……」

「じゃあ決まり！」

悠としてはその逆の意味で言ったのだが、彼女はお構いなしにブランコに乗る。

制服のままの彼女のスカートが靡くたびに、嫌な気持ちになる悠は、彼女を追うようにブランコに走ると、経ち漕ぎでぐんぐんとスピードを出す。

「おお、ずるいぞ、悠！」

「なにがズルイだよ。自分でこげつつの」

勢いをつける悠の頬をつめたい風が撫でる。すると、突然涙がこぼれる。

あの時、和子がそっへ温めてくれたとき、純粹に嬉しかったかもしれない。

もしくはただのスケベ心を隠すためのことなのか、とにかく、悠は人恋しくなっていた。

「ん？」

それは彼女も同じらしく、いつの間にか振り子を止めたブランコは、彼女を乗せたまま、揺れていた。

「美琴？」

「ん……何？」

「泣いてる？」

「少し……」

「そっか……」

「うん」

「いいさ、悔しいだろうし……」

「悠は悔しい？」

「ああ、悔しい」

「何が悔しい？」

「そりゃ、いろいろね……」

「いろいろじゃわからない……」
「いいだろ。なんかまだ整理ついてないし……」
「そうだよね……」
「ああ」
「あーあ、私また家庭教師を探さなきゃ……」
「ああ」
「今度は女の人にするね」
「ぜひ」
「でも、悠はダメだよ。塾か予備校に通ってね」
「なんだよそれ……」
「いいじゃん」
「はいはい」
「……」
「はああ……」
「ほんと言うとね……」
「ああ」
「牧夫のこと好きだった」
「ああ……」
「だから、ちよっぴりうらんでるの。悠のことも、和子さんのこと
も……」
「そっか……」
「牧夫と一緒に楽しいひと時。あの人、しゃべるのとか楽しいし、
大人びてたし、そういう人って周りにいないんだよね。どうしてだ
ろうね？ そういうのに弱いのかな？」
「しょうがないさ」
「本当、憧れと好きっていう気持ち全部ごっちゃにして、多分、
でも、好きだったの」
「わかったよ……」
「でね、あいつが私のこと、そういう目でしか見てなかったってわ
かったとき、すごく悔しかったの。わかるでしょ？ だって、両想

いだと思っただのに、ただの遊び相手の都合の良い女……んーん、商品の一つみたいだしね……」

「……」

「そういう現実、知りたくなかったの。ずっとこのままで、騙され続けられたら、そのほうが楽しいこととか一杯あったのに、楽だろうってさ……」

「違う。そんなのダメだ。赦さない」

「そうだね。違うよ。私、本当にバカだよ。それじゃあいつか終わりが来るのにさ。んーん、現実を生きてないって感じだし、終わるべきことなんだよね」

「そうだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845w/>

過ぎ行く日々、色褪せない想い.....。

2011年9月27日08時02分発行